The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラージェーンドラ・プラサード自伝(2)
Author(s)	
Citation	印度民俗研究. 1974, 2, p. 82-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラージェーンドラ・プラサード自伝 (2)

7　転　校

兄は予科[1]の卒業試験に合格するとカルカッタに出て医学校への進学を志望した．当時，ビハール人で医学校に学んでいた人は恐らく一人もいなかったのではあるまいか．一つにはカルカッタまで出なければならぬし，学資の都合をつけるのも並大抵のことではなかったからである．それにビハール人には入学許可を得ることも容易なことではなかったのだ！兄のカルカッタ行きが決まると私をどこの学校へやるかが問題になった．私はカルカッタへ行くべきではないということで兄がカルカッタへ行くと私はパトナーの学校からハトゥアーの学校へ転校させられることになった．ハトゥアーの学校ではこれまでとはいささか勝手が違っていた．教授法が県立チャプラー校やパトナーのＴ．Ｋ．ゴーシュ学院とは少し異なっていた．そもそも入学許可を得る時から気持よく事が運ばなかった．校長が試験をした上でないと許可できないというのである．

それでもなんとか入学は許可された．教授法が独特である．特に歴史の授業がそうなのだが，学習する課が指示されるとそれを翌日には暗んじて来なければならぬ．教師に命ぜられるとその課を初めら終りまで本を閉じて暗誦しなければならぬ．私はこのように解りもせぬことを暗誦したりすることはそれまでしたことがなかったし，記憶力もよくなかった．約半年間，その学校に在籍したのだが，一日といえども完全に暗誦できたことはなかった．精一杯の努力はしたのだがどうしても出来なかったのである．仲間の一人が，同じことを１２０遍繰返してやれば暗記出来ると言ったので私もそうしてみたのだが，一課を全部暗んじることはどうしても出来なかった．私は夕方になると決まって寝てしまい，朝４時頃に起き上がるのを習慣にしていた．ハトゥアーでは１２０遍の反復をするために夜中の１時半や２時頃に起床するのもめずらしくはなかった．それでも完全とはいかぬ．学校では教師が私の情けない様をみては立腹し，第４級に入れるべきではなかったとか，第５級に下げるぞ，と脅かしたりする．これは私にとってはらわたをえぐられるような苦痛の種であり，このハトゥアーでの生活ほど嫌な思いをしたことは学生生活のうちでほかにはなかった．時には，１学年とばして進級していなかったらこんなこともなかったろうにと考えるのであった．

とうとう私は重病人になってしまい，年度末試験が迫って来たのに寝込んだままであった．試験を受ければなんとか合格して進級もしていたろう．休暇に兄が家に戻ってきたのでなにもかも打明けた．兄は，年度末試験を受けて進級することはない．その学校をやめてチャプラーの県立校に戻ったがよかろう，との意見を述べた．結局そういうことに決まり，私は再度チャプラーの学校の

第4級に入った．

一方兄は兄で妙なことになっていた．医学校にはどうしたわけか知らぬが入学出来ずに，パトナーに戻って文学士課程に入っていた．私はその時にはすでにハトゥアーの学校に入学していたので，またすぐにパトナーへ連れて行くのはまずかろうということで，半年間ハトゥアーにいたわけである．

私は学校で習うことだけを頼りにしていた．一度も家庭教師をつけてもらったことはなかった．ハトゥアーでは成績がよくなかったので，いわば親戚筋にあたる教師の家へ習いに通っていた．教えてはいただくのだが，一日としてきちんと勉強が出来たことはなかった．そのハトゥアーの学校をやめたのは私にとっては大成功だった．チャプラーに戻ると再びこれまでなくしていた頭の働きを取戻したかのようであった．チャプラーの学校では第4級には生徒が大勢いたので3組に分けられていた．ベンガル人のラシクラール・ラーイ先生がおられたが，この先生が私たちの組の担任だった．たいそう優秀な先生で，教え方も上手で，生徒をとても可愛がっておられた．生徒も先生を大いに敬愛していた．先生は私たちの組の担任だったが，他の組も教えておられたので第4級の生徒は大抵知っておられた．私は先生に大変可愛がっていただいた．第4級には生徒が多かっただけでなく，優秀な生徒も少なくなかった．その中にはミドル・スクール（中等級）[2]の卒業時に上級での奨学金を確保して来ている者もいた．その連中は数学，地理，歴史の成績がよかった．というのは，すでに前の学校でヒンディー語で学んできていたので今度の学校ではただそれを英語で復習するだけのことだったからである．間もなく私は先生にも級友たちにも実力を認められるようになった．

ラシク先生には特別可愛がっていただくようになった．私はそれほど大勢の生徒の中では何の試験にせよそれまで一度も一番になったことはなかった．ところがその頃，ラシク先生がおっしゃったことがあった．「いいか，しっかり勉強するんだぞ．他の生徒もよく出来るが今に君の方が上位になるだろう．」なぜそういうことをおっしゃったのか解らぬが，結局その通りのことになった．ただその予言通りになるのに2，3年を要しただけのことである．学年末試験では私の成績は4番になった．褒美を少しはいただいたが，他の生徒がいただいたほうが多かった．第3級でもやはりラシク先生に教えていただいた．それにもう一人の先生にも習った．この先生は私には今なお忘れ得ぬ人であり今日も御存命のラージェーンドラ・プラサード先生である．この先生は歴史を教えておられたが，その教え方が大変巧みで，なんでも物語のように頭の中に入る．ハトゥアーの学校のやり方とは正反対だった．自分の言葉でうまく表現するのがよいとされるのであるから私にもそれは簡単に出来た．ハトゥアーで暗記の努力をしたおかげで，作文をしているととてもしゃれた表現の語句や文章が思い出される．自分の理解したことと暗記の努力が一体となって立派なものとなるので先生には大変お気に召すことになった．

第3級から第2級に進んだが，学年末試験では第3席になった．こうして第2級から第1級へ進級する時の試験では私が首席，ラーマーヌグラハ君が次席になった．ついにラシク先生の言葉通りになった．ラシク先生も私と一緒に昇格され，第4級から第3級へ，第3級から第2級へ，そし

て第1級を教えられた．もっとも，この間にラージェーンドラ・プラサード先生は転勤され，ラシク先生もしばらくの間ながら他校へ行かれたことがあった．ラージェーンドラ先生はそのまま戻ってこられなかったが，ラシク先生は戻ってこられた．仲間はみな先生が戻られたのを大いに喜んだが，とりわけ私は嬉しくてたまらなかった．

ラシク先生は教え方が上手だったばかりでなく，生徒の指導にもよく気を配っておられた．私はこの先生に感化されたところが一番大きかった．ラージェーンドラ・プラサード先生，それにペルシャ語を教えて下さった先生（モウルヴィー）にもかなりの感化を受けはしたが，ラシク先生は家族も同然だった．先生には厳しさも感じたが，親しみも覚えるのであった．教えて下さるばかりでなく，いろいろ参考になる話をして下さり，私の考えを改めても下さった．私はパトナーで2年間勉強したのだが，幼なかったので特に記憶に残っていることはない．ラシク先生は母国のことについても少し話して下さったし，人はどうすれば学問して立派な人間になれるかということについても語られた．第1級すなわち最終学年[3]に進んだ時には「しっかり勉強するんだぞ．君は大学に入っても優秀な成績をあげる力を持っているのだからな．」とはっきりおっしゃった．私にはその意味がわからず，ただ勉強すれば奨学金がいただけるようになるだろうと思っただけだった．

私が第2級の学年末試験を受けていた頃，チャプラーではペストが蔓延していた．2日目の試験が終わってからであるが，喉がはれあがり高熱に襲われた．そのため3日目の試験には出られなかった．家に連絡がとられた．驚いてやって来た父は田舎に連れ帰ると自ら調合した薬を飲ませてくれた．私は元気になった．ペストに罹ったのか普通のお多福風だったのかわからぬが，ペストの疑いが濃厚だったので，かなりあわてた．この騒ぎのために期日までに授業料を納めなかったので除籍されてしまった．試験の結果は私が2科目とも一番だった．それに成績もとてもよく，他の2科目の試験を受けなかったのに合格には十分なものだった．その頃，新任の校長が来ていたが，欠席の間に私の進級を認めていた．しかし，進級はしたものの授業料を納めていなかったのでやはり除籍処分になってしまった．体の具合がよくなったので間もなく学校に戻った．

ある日，ラシク先生が話された．「君は除籍処分になってつまらぬことをした．規則では大学入学試験に合格した後支給される奨学金は過去1年間同じ学校で勉強をした生徒にしかもらえぬことになっている．君は優秀な成績をおさめても奨学金はもらえぬだろう．しかし，方法がないわけではない．お父さんから教育長宛にこの規則の適用を免除していただくようにという嘆願書を出してもらうがよい．

私は嘆願書を書いてもらって提出した．それには，ペストに罹ったため家に戻ったので授業料を支払えず除籍処分になった旨を記した．また，試験の成績なども示して奨学金はいただけるものと思うが，規則が支障となっていることも書き添えた．校長は嘆願書を見ると，「これはつまらぬことじゃ．教育長にも規則をまげる権限はないのにわしがどうして推薦できようか．君がペストに罹ったかどうかわしにはわからん．」と言った．医者に治療してもらったわけではないので医者の証明書を提出することも出来なかった．ともかく校長は推薦せずに書類を上司に回した．

ラシク先生は校長が推薦しなかったというので残念がられた．こういうことでは教育長は承認

しないだろうと思われたので，「でも，嘆願書を出して損をしたわけではないからな」と慰めて下さった．嘆願書は視学を介して教育長に提出する規則であったので，教育長宛にはなっていたが，先に視学のもとへ届けられた．視学は嘆願書を読むとそれを教育長のもとにまで回すこともないと考え，承認の手紙を書いてよこした．校長は教室で，「君の嘆願書は視学に承認してもらった．」と言った．校長はさらに，「視学にそれを承認する権限があるのかどうかわしは知らぬが，君は心配せんでよい」とも付け加えた．

ラシク先生はこのことを耳にされると大変喜ばれ，私をいっそう励まして下さった．ついては謝礼もとらずに御自宅にまで呼んで全学科にわたって私の解らないところを教えて下さるばかりか毎日勉強の方法や段取りについて指示を与えて下さった．先生は，私が大学に進んでからもよい成績をおさめるに違いないと確信を持っておられたのだが，私は自分如きものが大学でよい成績をおさめるなど夢にも思ってみたことはなかった．

当時，奨学金には3種あった．第1は月額１０ルピーのもので，県全体で最優秀の生徒2，３人に支給されるもの，第2は月額１５ルピーのもので今日のパトナー及びティルフト両地区の7県から成っていた地区（ディヴィジョン）全体で最優秀の生徒2，３人に支給されるもの，第3のものは月額３０ルピー支給されるもので，大学全体で最優秀の１０人に支給されるものだった．当時ビハールはベンガル州に属しており[4]ベンガル，ビハール，ウリーサー（オリッサ），アッサム，それにビルマまでがカルカッタ大学の学区に入っていた．この全学区に同一の試験が実施され，最優秀の生徒１０人に月額２０ルピーの奨学金が支給されるのである．私の念願はせいぜい１０ルピーか１５ルピー程度の奨学金をいただくことぐらいで，それ以上のことを願ってみたことは一度もなかった．しかし，その念願にせよそれを達成するにはよほどの努力をしなければなるまいと思っていたので，かなりの努力を続けていた．

大学の統一試験[5]に先立って学んでいる学校で学校別の試験が行なわれる．その試験に合格したものだけが大学の試験を受けることが出来るわけである．私はその試験でよい成績をあげ，一番になった．大学入学試験の受験許可はもらったのだが，やっかいなことを一つ片付けねばならなかった．学科目として図画があった．これは選択になっていたのだが，奨学金決定の際にその点数が加算されるのである．他の科目ではかなりの点数をとっていたのだが図画の先生に入学試験に図画を選んでもよいとの許可を出していただけなかった．図画の配点は2，３０点だったがその試験を受けられないことになると２０点あまりがもらえぬばかりか，奨学金までもらえぬことになる．いろいろと努力した結果，ようやくのことで入学試験の日まで毎日一時間図画を勉強するという条件で受験を認めてもらった．私はその条件をのみそれに従った．おかげでもしそうしていなかったら図画で２５点ももらえなかったろうし，席次もそれ以下になっていたに違いなかった．試験日が迫ってきたので試験日の数日前にパトナーへ向かった．

試験をすませるとパトナーから家へ戻った．兄も休暇で家に戻った．兄はカルカッタから帰ってパトナーの大学へ入ったのだが，重病になったため医者のすすめでイラーハーバード（アラーハーバード）へ移った．イラーハーバードではムューア・セントラル・カレッジに入学し，その年，

文学士の学位を得た．さらに文学修士と法学士の課程を修めるために再びカルカッタへ出た．イラーハーバードとカルカッタに暮らしていたので兄は休暇で家に戻るといろいろなことを教えてくれた．私はその話に耳を傾け，出来るだけそれを参考にするようにしていた．おそらく１８９９年にイラーハーバードから戻った時に国産品愛用[6]（スワデーシー）のことを話してくれた．国産の衣料も持ち帰って来ていた．私もその時から国産品を着用するようになり，ガンディー・ジーがカッダル（手織り）[7]を強調されるよりも前から国産品ばかりを愛用していた．ただ一度だけ舶来品を幾着か買ったことがあるが，これについては後で述べることにする．兄はその頃から国産品愛用を始め，私にも勧めた．兄はそれ以来舶来品はただの一着も買わなかった．そればかりか，手織りが普及するに及んでからは手織り以外の品は国産品であろうとも決して買わなかった．

国産品愛用については衣服に限ったことではなくて出来る限り他の品々を買い求める際にも気をつけていた．大学の試験を受ける時の用にと私は特に国産のペンとペン先を買い求めた．兄はいつもこのような品をイラーハーバードやカルカッタから買ってきた．私たちはなにも知らぬままに国産品と思って買っていたのはそうではなかったようで，今になってみると店主たちに騙されていたように思える．しかし，私たちの信念はゆるぎなく，国産品と信じて買っていたのである．

休暇に入り，私たちがそろって夕方の散歩に出かけようとしていたところへだれかが来て試験の結果が官報に出た，と告げた．シーワーンへ行ってみると，私は第１級[8]の成績で合格したことだけが判った．まだ奨学金のことは発表になっていなかった．数日後同じように夕方散歩しているところへだれかが私が大学全体の首席で試験に合格した旨の電報を持って来てくれた．兄は電報を読むと大喜びしてくれた．兄と一緒に家に駆け戻り父に知らせた．兄は大学全体で首席になることがどういうことなのか，その意味を説明した．父も母も家中の者が大喜びだった．私は兄の意見に従い以前から試験に合格したらカルカッタのプレシデンシー・カレッジ（Presidency College）に入学することに決めていた．入学試験の願書を提出する際に，もし奨学金が支給されるようであれば，同校への入学を希望する，と書込んでおいた．それに基き私のカルカッタ行きは直ちに決まったわけである．

チャプラーの学校にいた頃，私はあるパンディットのもとに住んでいた．大変に有名な占星師であり，今日もまだ達者にしておられる．パンディット・ヴィクラマーディトヤ・ミシュラ先生である．この方が私の保護者名代であったが，自らも学生に教えておられた．毎日サラージュー川で身を清め，他人の触れた水さえお飲みにならぬような方で熱心に祈禱しておられた．チャプラーにはハトゥアー侯の建立になる小寺院もあった．このようないろんなことが子供心にそれなりの感化を及ぼした．私たちは自分たちをサナータナ派[9]に属していると考え，アーリヤ・サマージ[10]の布教師が来ることがあれば，議論を挑んだりした．ラグナンダン・トリパーティー・マハーマホーパディヤーヤ（大博士）が私たちの学校の校長であった．学校ではペルシャ語を習っていたが，家ではミシュラ先生からサンスクリットも少しは習いかけた．ラグカーウムディー[11]も少しは習ったのだが続けることが出来なかった．チャプラーの学校のことは今なおすがすがしい思い出となって残っている．

私は休暇以外には家に戻らなかった，と記憶する．休暇で帰ると母は大抵少しでも長い間家にひきとめておこうとするのだが，私はすぐには「うん」と言わない．休暇にはジーラーデーイーで思い切り遊ぶことしかすることはなく，大抵はチッカー遊びにつぶしてしまう．兄も家に戻って来て私たちと一緒に遊んだ．

チャプラーでの暮らしは質素なものだった．手もとにお金を持っていたことは滅多になかった．あるモーディー（食料品商）の店でなんでも買い求められるように話を決めてあった．これは兄がチャプラーの学校にいた時分から続いていたことで，毎日，伝票に入用なものを書いてモーディーのところへ持って行き，米，豆，ギー，薪炭，それに，間食のカチョーリー[12]や菓子などを受取る．このモーディーはハルワーイー・カースト[13]の者だったので，なんでも提供出来たわけである．クンジャリー（野菜売りの女）は同じような契約で野菜を持ってきていた．モーディーはジーラーデーイーを訪れては伝票を見てその代金を受取ることになっていた．クンジャリーの女はジーラーデーイーに行く必要はなく，訴訟などの用事でチャプラーによく出かけていたわが家の代理人が清算していくことになっていた．（学校の）授業料もやはりこの代理人が支払うし，衣類を買い求める時にもやはり買ってくれることになっていた．このようなわけでチャプラーにいた間中，私の懐中に金のあったことは殆んどなかったろう．

わが家の経済はあまり芳しくなかった．土地・田畑は大伯父の代やヌーヌーおじの代と変わらなかったが，二人が亡くなってからは父は不如意になっており，私たちの学資に現金を調達するのにも大変苦労していた．モーディーもジーラーデーイーでは現金を受取れず，時々，どこかの村のタフシールダール[14]に宛てた父の手紙をもらいジーラーデーイーからさらにその村へ行き，そこで代金の支払いを受けることがあった．チャプラーでの生活費はわずかなものだったのでなんとか都合がついていたのである．私は一度もお金に不自由な思いをしたことはなかった．それに兄がこのことについてはいろいろと気をつかってくれて，休暇で帰ってくるとその手配をしてくれていたからでもある．しかし，兄の学資はイラーハーバードへ送らねばならなかったので父は苦労したようだが，子供たちの学資はどうしても工面しなければならぬと心に決めていた．

ザミーンダーリー関係の仕事を担当していたディーワーン（執事）がいたが，この人は祖父の代から勤めていた人で，仕事には精通していた．父は大伯父の存命中はザミーンダーリー関係の仕事はしなかったのでこの人を信頼するほかなかった．私の記憶に残っていることだが，兄は受験料を納めることになり，期日までに５～６０ルピーを納めなければ一年間受験を延期しなければならぬ，と手紙に書いて寄こした．父の手もとに金はなく，ディーワーンも村で都合することが出来なかった．父は弱りきってとうとう母の金の首飾りを質に入れて送金した．なにもかもそろっているのに時折食事の仕度も遅れるようなことさえあった．兄は，このようなことはみなディーワーンの仕事のきりまわしがまずいから生ずることだと不満に思っていたが，どうすることも出来なかった．休暇に一度戻ってきて少しは仕事をみたりしたがイラーハーバードの学校にいる間は特にこれといったことも出来なかった．

ザミーンダーリーの上がりは年に７～８千ルピーほどであった．それから御上へ納入する分を

差引けば5～6千ルピーのものが残った．数百ビーガー[15]の田畑で，米，小麦，とうもろこし，アルハル豆，大麦などの収穫がかなりあった．さとうきびから製造する黒砂糖は若干現金収入にもなった．この田畑のあったおかげで子供時分のわが家は穀物であふれるほどになっていた．牛や水牛は相当な乳を出していたし，牡牛も数頭いた．ところがその頃は一体どういうことになっていたのか稲は自家消費分にも事欠く有様で，他の穀物も買求めねばならぬようなことだった．父はあまりに欠損ばかり続くのでしばらくの間耕作を止めさせたこともあった．いささか苦難の日々であったが，父は元気を失わず，人にはこの二人の息子が私の財産です，と話していた．

これに関連したことでもう一つここに書きとめておくべきことがある．ヌーヌーおじが亡くなり，大伯父と父とが残された．私たちはまだ子供だった．前にも記したようにザミーンダーリーはみな大伯父が手に入れたものであり，大伯父の稼ぎ出したものだった．ヌーヌーおじには子は娘一人しかなかった．ヌーヌーおじの死後，だれかが，大伯父に，大伯父の死後ヌーヌーおじの一人娘とおばとが困るだろうから，なんらかの対策を講じておいたがよいと話した．大伯父は遺産分与書を書くことに決めた．証書はシーワーンで作成された．それによるとおばの暮らしのためとして年額1千ルピーの上がりのある2ケ村がおばにその存命中与えられることになり，その娘にはすべてのザミーンダーリーの収入の16分の7が与えられることになっており，残り16分の9が私たちのものとなっていた．

一家はこれまでずっと共同生活[16]をしてきていたので，大伯父にこのような遺産分与の権限があったのかどうか判然としていなかった．遺言状も書かずに大伯父が亡くなっていれば，全財産は父の所有となり，おばはただ食扶持しかもらえず，その娘はなにももらえなかったろう．それで一部の人が大伯父に遺言状を書くように勧めたのであった．父はつんぼさじきに置かれていた．なにもかも手筈が整ってからある日登録吏が登録にジーラーデーイーにやってきた．みなは，父がもし遺産分与書に署名すれば，後になって文句を言うことは出来ぬし，万事決着がつくと注意した．登録吏がジーラーデーイーにやってきてから父には事の次第がようやく判ったようなことだった．大伯父は父に署名を求めた．大伯父は父が恐らく承諾しないだろうと聞かされていたのだが，父は，「伯父さんのおっしゃる通りに致しましょう．私はそれで結構です．育てて下さったのも伯父さんですし，財産はみな伯父さんが築かれたのですから，たとえ全部が全部をチャンドラムキー（ヌーヌーおじの娘）におやりになろうとも私は構いません．私には2人の息子が宝ですから伯父さんがこの子らに祝福を与えて下さるだけで満足です．」ときっぱりと言った．私たちもそこに呼ばれていたが，大伯父は声をあげて泣き出し，大伯父にあれこれ告げ口をして疑念を抱かせた連中を罵り出した．父は署名した．登録吏は手続きを済ませて戻って行った．

不幸なことに，私がハトゥアーの学校にいた頃，チャンドラムキーは病気に罹り，薬石の限りを尽くしたのだが未婚のまま亡くなってしまった．おばは長生きをし，収入は聖地巡礼などに用いていた．おばの死後，ザミーンダーリーはみな私たち兄弟のものとなった．おばは大抵の聖地へは詣でていた．未亡人になって家に戻ってきている私の姉がおばと一緒に巡礼に出かけていた．2人はあたかも聖地巡礼や願行の競争でもしているようなことで沐浴[17]とか儀礼とかで欠かしたもの

はないといってもよいほどだった．2人は四聖地，[18]すなわち，ジャガンナート，ラーメーシュワル，ドゥワールカー，バドリーナートに詣でていた．姉はバドリーナートへは2，3度行った．母はほとんど家に居り，聖地巡礼に時折出かける程度だった．私はまだ大学に入る前，母とおば，それに姉と一緒に一度はアヨーディヤー[18]へ，2度目はマトゥラー[19]とヴリンダーワンへ行ったのを覚えている．このような旅行にはかなりの費用がかかるし，ずいぶん苦労の多いものだった．この旅行の時，聖地では，パンダー[20]たちが大変な仕事をするものだと感心したことだった．私たちはパンダーの家に泊まった．パンダーたちはずっと私たちにつききりで，あらゆるところへ案内してくれ，なに一つ不自由な思いをさせなかった．いつのことか私には記憶がないが，大伯父やおじ，それに父などがやはり同じ所へ行き，同じパンダーの帳面に記帳していたのであった．パンダーたちには年に一定額の礼金を支払うようになっており，毎年ジーラーデーイーにお金を受取りにやって来ていた．このようなわけでパンダーたちは私たちを特別にもてなしてくれるし，パンダーたちにはまた布施も手に入るというようなことであった．こうした喜捨。祈禱。聖地巡礼。沐浴などで家中の「指揮官」になるのは姉であったが，今日も同じである．家では絶えずなにかのお祈りが行われていたが，今もなおそれには変わりない．

こうして学生時代が過ぎていった．家にはあまり関係がなくなり，休暇の時だけ戻るようなことであった．結婚はしたものの妻と会うことは僅かしかなかった．そうして戻ってきても会うのは夜になるようなことだった．一度妻がコレラに罹ったことがあった．ちょうど私が家にいる時だったが，父の薬と治療でよくなった．だが父は随分案じてくれた．私まで心配のあまり様子がおかしくなった．妻のことに気をつかうのは当時の風潮としてはみっともないこととされていた．私は心配で容態を知りたかったし，看護したくもあったがだれにたずねるわけにもいかず，看護したいとも口には出せなかった．家族はだれも私が妻の病気に関心があることを感づかなかったのだろう．ともかく快復したので私は安堵したが，容態が悪化でもしていれば何時まで人目をはばかっておれたかわからない．

このように家の中にずっとひきこもっていては兄嫁も私の妻も健康を損うのは当り前のことでその通りになったまでのことだった．2人とも幾日かずつ交代のようにリウマチに苦しめられていたが，ずっと後になって家の中をのびのびと歩くようになってやっとその病気から解放されたようなことである．

(註)

1　F．A．（First Arts）もしくはIntermediateという．小学校入学から数えて11，12年級に相当．

2　4年間の小学校と4年間の中学校の計8年を終了したことになる．本文にあるように教育がインドの言語で行われるか英語で行われるかにより系統を異にしたため一部の生徒は英語を媒介語とする教育を受けるため実際は下級学年に入っていたわけである．

3　EntranceもしくはMatriculationと呼ぶ．第10年級で，これを終えると大学（カレッジ第11年級以上を呼ぶ）入学資格を得る．

4　１９１１年にベンガル州からオリッサと共に分離してビハール。オリッサ州となる．さらに１９３５年にオリッサ州と分離．

5　インドでは官立校であれ私立校であれいずれかの大学に直属もしくは加盟しており，その大学内では統一の試験が行われ学力が認定される．

6　Swadeshī　本来，自国の，国産の（品），などの意で，あるが，一般に１９０５年のベンガル州分割の際に反対運動の強力な一翼をになった国産品愛用。外貨（英製品）排斥運動をさす．このような主張そのものは１９世紀の７０年代初頭からベンガル地方を中心に現われていたが，インド国民会議の賛同を得て一段と大衆的な運動となるのは本文にもあるようにベンガル分割反対運動を機とした．

7　Khaddar－手織り一般，特に手紡ぎの綿糸を手で織ったものを指す．国産品愛用運動によりこれを着用することが強調された．これを着用することは愛国者の標識となり，コングレス党員の代名詞とされたが，後には着用者の道義的堕落のため見せかけや偽善といった皮肉な意味にも用いられるようになった．

8　大学の試験成績の総点平均によって評価が第１級から第３級までに分けられる．

9　Sanātanī－Sanātana dharma，すなわち，「永遠の法」を信仰する人の意．ここでいう永遠の法とは伝統的なヒンドゥー教のことであり，改革派に対し正統派の意も持っている．

１０　Ārya Samāj－近代ヒンドゥー教改革派の一．グジャラート出身のSwāmī Dayānand Sarasvatī（１８２４－１８８３）により１８７５年に最初ボンベイに設立される．その後，パンジャーブ地方を中心に北部。西部インドで活潑な活動をしてきた．ヴェーダのマントラのみを天啓のものとすることや偶像崇拝を排斥したり，カーストを生得のものとしないなどの重要な点で伝統的なヒンドゥー教と立場を異にする．１９世紀末から今世紀にかけて民族意識の高揚，民族教育の振興のほか寡婦の福祉，幼女寡婦の再婚などの社会改革運動にも力があった．

１１　Laghu kaumudī――パーニニの文典の解説書（Bhattojī－dīkshita の Siddhānta Kaumudī）の Varada－rāja による摘要で，インドでサンスクリット学習者の入門書の一．

１２　Kacaurī－ひき割りにした豆に小麦粉のころもをつけ，ギーや油であげたもの．

１３　Halwāī　－　北部インドの菓子製造販売を生業とするカースト．菓子類やその他の食品にしてもギー（精製バター）や牛乳を用いたものであれば，高いカーストの者もハルワーイーから買い求めることができる．なお，いずれのカーストもハルワーイーから水を受け取ることができる．１４の註１を参照のこと．

１４　Tahsīldār　－　本来，tahsīl（郡）の徴税人のことをいうが，ここでは，ザミーンダーリーの集金人をさすものと考えられる．

１５　Bīghā　－　面積の単位．１ビーガーは８分の５エーカー．

１６　原文には ijmāl とあるが正確には bi'lijmāl という．「全体で，共同で，集団的に」などの意．

１７　罪障を洗い流すために聖なる川や湖などで沐浴すること．随時に行われるものと暦により

特定の日時に行われるものとがある．

１８　ヒンドゥー教の聖地はインド亜大陸に非常に多数あるが，そのうち次の四聖跡地（ cār dhām ）が東西南北の四端に位置する四大聖地とされ，多くの信徒が詣る．Jagannāth ーウリーサー（オリッサ）州のベンガル湾に面したプリー市に位置．Jagannātha（クリシュナ神）を祀った寺院がある．正確には，Rameshvaram ー マドラス州ラームナートプラムのパーンバン島にある聖地．シヴァ神をまつった寺院がある．Dvār(a) kā ー グジャラートのカーティヤワール半島の西端にある．同地のRaṇchorjī寺院にクリシュナ神が祀られている．Badrīnāth ー ウッタル。プラデーシュのチャモーリー県に所在．ガンジス河が氷河と分かれる．ヴィシュヌ神（Badrīnātha）を祀った寺院がある．

１９　Mathurā，ウッタル　プラデーシュ西部，ジャムナー川西岸に位置する都市で，１０ＫＭほどの距離にあるVrindāvanと並びヒンドゥー教徒の聖地．クリシュナ信仰に関連のある多数の寺院と沐浴場（ghāṭ，ガート）があり，全土から参詣者がある．

２０　聖地。巡礼地で巡礼者の案内や世話を専業とするブラーフマン（バラモン）．堂守や調理人となっているバラモンをさすこともある．

８　進　学

試験の成績が発表になってからチャプラーへ行ってみると，成績がよかったのは私だけでなく私たちの学校全体もよかったということが判った．同級のラーマーヌグラハ君は月額２０ルピーの奨学金をもらったし，他にも２人が１５ルピー，２人が１０ルピーの奨学金をもらうことになった．それに上級の成績で合格した者もかなりおり，不合格だったのは１人か２人であった．県立チャプラー校がこのような成績をおさめたのは創立以来のことだった．ビハール全体でも今までこれほど優秀な成績をおさめた学校はなかった．当然のことながら学校関係者は大喜びでチャプラーの弁護士界も喜びに湧いていた．弁護士のブラジュキショール。プラサード氏はすでにチャプラーで開業しておられたが，まだ新進で意欲に燃えておられた．間もなく名が知られるようになり，とりわけ弁護士界の有力者となられた．私の故郷の村からわずか１０キロほどのところに住んでおられたのだが，私は存じ上げていなかった．私がチャプラーに出かけた時に兄と相談して私のためにちょっとした祝宴を張り，お招き下さったのだが，折悪しくちょうどその時病気に罹り出席できなかった．

チャプラーではまず初めにラシク先生を御自宅にお訪ねした．先生はとても喜んで下さり，早速マンゴーと菓子を御馳走してくださった．長時間私をひきとめられ，「この試験の結果，君の責任は非常に大きなものになったのだ．」と話された．「ビハールの学生が大学全体で一番の成績をおさめたのはこれが初めてのことなのでベンガル人学生にはこれが我慢ならないだろう．連中は予科の試験では君を負かそうと懸命な努力をすることだろう．それに質のよくない連中はほかのことでも君を痛めつけてやろうとねらって来るに違いない．だからカルカッタではよくよく注意と警戒を忘らぬようにして今の成績を保持するようにしなければならぬ．どのようなことでも私に報告してどのような形にもせよ忘けたり愚かしいことをしてはならぬ．カルカッタは大都会だから遊びご

とも多く，よからぬことも山ほどある．なにごとにも誘惑されぬようにして，学校では精一杯頑張って成績が下がらぬようにしなさい．」先生は，予科でもどうあっても一番にならなければならず，もしそれに失敗すれば大変まずいことになるだろう，と思いこんでおられた．こういうわけで先生はいろいろとこの点について強調してカルカッタへ旅立つ私にはなむけの言葉を下さった．ところが，私は下宿に着くとすぐに熱を出してしまい，出発を延期することになった．数日して元気になったので兄と一緒にカルカッタへ向かった．

カルカッタでは兄は以前からイーデン・ヒンドゥー・ホステル（寮）に住んでおり，ダフ・カレッジの修士課程で歴史を学び，リポン・カレッジの法学士課程で法律を勉強していた．私は兄と一緒に寮へ行った．カルカッタへ出たのは初めてだったので建物や道路，市街電車などを見て驚いた．ホステルはチャプラーの下宿に比べてみるとまるで宮殿のように思えた．あまり遅れて行ったものだから寮はすでに満員で空部屋は全くなかった．それで兄の部屋に泊まっていた．プレジデンシー・カレッジに行ってみるとやはりかなりの学生が来ており，後から来た者は入学許可を得られなくなっているのが判った．[1]校長はＰ．Ｋ．ラーイ氏であったが，兄が校長に会って話したところ入学を許可された．入学は出来たがホステルは満員だったので，やっとのことで兄のいた４人部屋に私を入れて５人が入ることになった．

教室へ行ってみると一風変わっている．それまで頭になにも被っていない学生を一度にこれほど大勢見たことはなかった．中には洋服を着用しハットを被っている者がいた．イギリス帰りの弁護士や医者などの息子たちであった．私はそれまでインド人の学生がハットや洋服を着用しているのを見たことがなかったので，ひょっとするとこの連中はアングロ・インディアンかクリスチャンではなかろうかと思った．ところが教師が出席をとった時に名前を聞いてみてようやくヒンドゥー教徒であることが判ったようなことだった．当時は一般にムスリムの学生は名目上は別の学校に所属するものとされていたが，予科ではプレジデンシー・カレッジで勉強していた．彼等は特典で授業料１２ルピーのところを４ルピー納めればよく，名簿も別になっていたが，それ以外のことはみなプレジデンシー・カレッジの学生と変わらなかった．もっとも，寮は別になっていた．彼等の中にはインド帽子をかぶっている者がいた．そこにはマールワーリー[2]の学生も１，２名いた．学校では学生を１クラスにまとめきれなかったので３クラスにわけられていたが，授業そのものは同じことだった．

その頃の私は学校へ行く時は，チャプカン[3]にパージャーマーを着て，縁なしの帽子をかぶっていた．予科では英語のほかにもう一つの言語，それに☆p.117物理学と化学が必須になっていた．予科では物理はＪ．Ｃ．ボース博士が，化学はＰ．Ｃ．ラーイ博士が教えておられた．私が入学して最初に受けた授業は化学だった．Ｐ．Ｃ．ラーイ先生が出席簿を読み上げられた．全員の名が呼ばれ，皆が返事した．私は自分の出席番号を知らなかった．最後まで待って，最後の番号の学生が返事をして先生が出席簿を閉じようとなさったので私が立上って，自分の出席番号を知らない旨を述べた．先生は私の方を見て「ちょっと待ち給え．マドラサーの学生の出席はまだとっていないから．」と言ってすぐ別の出席簿を手にされた．先生は私がパージャーマーをはき，インド帽をかぶっている

のでてっきりムスリムの学生だと考えられたのだと思った．私は「マドラサーの学生ではなくてプレジデンシー・カレッジの学生ですが，今日入学手続きをしたのでまだ出席番号を知りません．」と申上げた．先生が名前をたずねられたので答えるとみなが私のほうを見た．同名の学生が今年度の大学入試では首席になったのを皆知っていたからである．ラーイ博士は，「名前はまだ名簿にのっていないので後で今日の分も出席につけておくから．」と言われた．それからこんなに遅れて登録した理由をおたずねになった．こうして先生との初対面をし，また，同級生もはじめて私の顔を見たような次第であった．

ヒンディー語を知っている学生はクラスにはほとんどいなかったので，自然とマールワーリーのデーヴィープラサード・ケーターン君と一両日の間に親しくなった．それにもう一つの理由は彼も私と同じビハールから来ていたこともあった．彼の父親はビハールで刑務所に勤めていた．ベンガル人の学生とも顔見知りになったが，そのうち幾人かとは急速に親しみを増し，今なお交際を続けている．わずか2，3人ながら名をあげてみると今日ベンガル州の州理事官をしているヨーゲーンドラ・ナーラーヤン・マジュムダール君，地方長官補になり今日は政府秘書官のギリーシュチャンドラ・セーン君，翻訳官をしていたアヴィナーシュチャンドラ・マジュムダール君．J．M．セーングプタ君は悲しいことに今はこの世にないが，私と肩を並べて勉強し，同じ寮に住んでいた．

通学しはじめてから一週間とたたぬうちにまた熱が出るようになった．チャプラーでマラリヤに苦しめられたのだが，今度はそれがもっとひどくなり，数ケ月間よくならなかった．寮の医者があらゆる手をつくしたのだが，毎日の発熱には変わりなかった．まれに一両日間よくなっても3日目か4日目には激しい悪寒に襲われる．兄も大変心配した．ある日のこと公会堂で大集会があった．インド総督カーゾン卿[4]のなにかの政策に関して民衆の声を表明するためベンガルの著名な指導者や雄弁家たちが演説することになっていた．スレーンドラ・バナルジー氏[5]等の演説も予定されていた．2，3日来熱もなかったので，みなはもうよくなったのだと思っていた．兄もホステルの学生たちと一緒に集会へ行った．私の部屋にも近くの部屋にもだれ一人いなくなった．一人きりになったところへ悪寒がして熱が出てきた．横になったまま体温計で計ってみるとだんだん上がって41度を超えた．私は驚きあわてたが，だれもそばにいないのだからどうしようもない．もうこれで兄の顔も見れぬのではなかろうかと思ったほどだ．ところが，熱は次第に下がり，兄が戻って来た時にはすっかり下がってしまっており，兄が出かけて行った時となんらかわりはない．兄にすっかり様子を話すと兄は，「もうこれからはたとえ元気な時でも一人残しては外出しない．」と言った．そうこうしているうちにダシャラー祭[6]の休暇に入った．それまでに私は4，5日しか登校出来なかった．

休暇に入り，ようやくのことで家に帰ったところ元気になった．1ケ月ほどの休暇だったが，休暇が終わってカルカッタへ戻るとまたマラリヤに襲われた．私はとてもあわて，兄も大変心配した．当時は学校の授業に一定の日数出席していないと年度末に試験を受けられないことになっていた．これほど欠席を重ねたのでは所定の出席数に達するのは難しいだろうし，受験も許可してはもらえまいと心配になった．時折，カルカッタを引揚げてイラーハーバードに行こうかとも思う．と

ころが年度の途中での転校を両方の学校が認めてくれるかどうか，それに転校したにせよ，出席日数が足るまいし，このまま1年間は無駄になってしまう．ラシク先生が入学時の成績を維持しなければならぬ，と言われたことも思い起こされる．全く憂うつだがどうにも仕方のないことで，手の施しようがない．兄がニールラタン・サルカール先生の病院へ連れて行ってくれた．処方に従ったところ熱が出なくなり元気になった．ほとんど1年間その処方に従ったが，その間に一体どれほどのキニーネを用いたことやらわからぬ．同種療法の医者がそれから25年ほどして語ったところによると現在私が喘息に苦しんでいるのはその時服用したキニーネの所為だ，ということであるが，どこまでがほんとうのことやら・・・．

快復後私は懸命に勉強にとりかかった．3，4ケ月分立遅れていたのでそれを取戻さねばならぬし，大学内での自分の成績順位を守らねばならぬ．全科目に一番になるよう心掛けて勉強した．各科それぞれの教科書のほかに参考書を3，4冊ずつ読破した．数学が苦手だと思っていたので，それには特に念を入れ代数，三角法，円錐曲線法について手に入るだけの本を用い，それに出ている問題を一つ残さず練習した．これまで大学の試験に出たものを全部同じようにかたづけた．

私は予科を終えてから理科に進みたいと思っていた．J．C．ボース博士，P．C．ラーイ博士の教え方があまりにも素晴らしかったので，そちらに興味を感じ，知識欲をかきたてられた．それにまた歴史のヴィナエーンドラナート・セーン教授も良い先生というばかりでなく，人格者でもあった．先生にはずいぶん可愛がっていただき，病気の折も見舞いに来て下さったこともあった．しかし，理科の方の興味が強く，その関係の書物を手に入るだけ読んだ．そのころは実験は予科の学生には積極的にはなにも用はなく，書物の知識だけで十分とされていた．私はほとんど理学士課程の知識を書物から得ようと努めた．一つだけ思うようにならなかったのは数学は上に進めば今以上に必須となるのに随分努力しても成績が上がらないことだった．それだけに余計に勉強した．

こうして2年経ち予科卒業試験の日が近づいてきた．ベンガル人の学生とも親しくなった．ラシク先生がおどされたことがあったが，その気配さえ感じられぬほどで，仲良く過ごした．人から変な目で見られることも，感情の行き違いもなかった．だれとも親しくなり，幾人かとは入魂の間柄になり，今でも出会えばその頃が昨日のことのようになつかしく思い出される．

大学実施の試験に先立ちカレッジ内の試験が行われる．その試験の結果，私はほとんどの科目で一番になった．1，2の学科では所定の出席数に達しなかったが，先生の配慮で大学の試験を受けられるように出席回数を少し増してもらった．大学の試験の前にちょっと面白い事件があった．私はほとんど全科目で一番になっていたのだが，カレッジ内の試験の結果が発表された際に大学の試験は受けられないことになった，と伝えられた．当時，イギリス人が校長だったが，試験の結果を自ら伝えに来た．学生が集まり，校長は1人1人の名前を呼び上げたが，私の名が出てこない．私の名が誤まって名簿に記載されていなかったのだ．私の名前が読み上げられなかったので学生たちはびっくりし，私はあわてた．「名前が読み上げられなかったのですが」と私が言うと，予科では教えていなかったため学生を知らぬ校長はすぐさま，「それは君が不合格だったからだ．」と答えた．私は，再度，「先生，そういうことはないと思います，私は絶対合格しています．」と言い

切った．「君，合格しているのなら名前が載っていない筈がなかろう．」との返事に私はもう一度口を開こうとした．すると校長は立腹し，「黙れ，罰金[7]だぞ．」と脅かした．私はそれでも敢えて口を開いた．すると，「5ルピーの罰金だ．」との返事．私はまた同じことを言った．「10ルピーの罰金だ．」こうして言い合っているうちにまるで競売のように金額が上がって20ルピーか25ルピーにまでなった．見世物も同然だ．私はどうしてよいやらわからぬ．そこへ私を知っている事務長がやってきて，校長の後ろから，私にうまくゆくから黙れという意味の合図をしたので，私は黙った．

翌日，受験の願書などを書き込んで提出した．だれからもなにも言われなかった．その事務長の手で訂正された．事務長が校長に間違いを指摘したのか自分の間違いを認めたのかどうかは知らぬ．罰金についてはだれも払えとも言わなかったし，催促する者もいなかった．私も自分から納めようとはしなかった．もっともこの件があったためにチャプラーの学校で図画の教師が予科の入学試験を受けさせまいとしたことを思い出した．

予科の試験には万全を期した．結果もある意味ではよかった．ある意味ではというのは，私は一番になったのだが理科と数学で一番になろうと思っていたのが果たせなかったからである．それに他の学科よりもよけい勉強していたからである．英語とペルシア語，それに論理学はほとんど勉強しなかった．ところが試験の結果が発表されてみると英語，ペルシャ語，論理学では私が最高点を得ており，他の学科は僅少の差ながら人に負けた．もっとも合計すると私が一番よかったのだが．予科の入学試験で一番だったので月額20ルピーの奨学金をもらったが，ほかに英語も一番だったので別に月額10ルピーの奨学金をもらった．予科の卒業試験で一番だったので今度は月額25ルピーの奨学金を2年間もらうことになり，英語も一番になったので，月額10ルピーの奨学金，それに外国語で一番になったので，ダフ奨学金と呼ばれていた月額15ルピーの奨学金をいただいた．論理学で一番になったので賞品として書物をもらった．この結果，私は数学はだめで従って理科系はだめだろうと考えてしまった．

試験の結果，私は意を翻えして理科系に進まず，文科に進むことにした．当時は予科の学生はみな同じ教科を学ばねばならなかった．全学科を履修しなければならず，その後で理学士課程に入って理科を，文科に入って英語や哲学を勉強することになっていた．文科に進んでからのことである．P．C．ラーイ博士にお目にかかることがあった．先生は，「君はどうして理科に入らなかったのかね．（Why have you deserted our standard ?）」とおたずねになった．私は，「数学がだめなんです．」と答えた．先生は「なぜ私に相談しなかったのだ．私も数学はあまりわからぬが，それだからといって理科から逃げ出しはせぬ．」とおっしゃった．先生は残念がられたが，大分日が経ってからのことだったので今さら変更しようにもできなかった．

2年間私はラシフ先生の言いつけを肝に銘じて再度一番になろうと努め，それを果たすことができた．先生はこの間にカルカッタへ転勤されたので，お目にかかるととても喜んで下さった．時々，先生宅にお伺いしたが，間もなくお亡くなりになった．

(註)

1　大学認定の統一資格試験に合格しても，上級学校で入学を許可してもらわなければならない．入学許可の権限は各カレッジの校長にある．

2　Mārwārī ― もともと今日のラージャスターンのマールワール地方の住人をさしたが，その中にインド各地に出て商人。金貸しとして活動するものが多かったので，マールワーリー商人（資本家）をさすようになった．今日ではラージャスターン出身の商人の意に用いられることもある．

3　Capkan ―ぴったりした丈の長い上衣．

4　創刊号Ｐ．５８の(註)３を参照．

5　Surendranāth Banarjī　(1848－1925)　ベンガル出身の政治家．１８７６年に政治結社 Indian Association を設立，１８８５年にはＯ．ヒューム等とコングレス（インド国民会議）の設立に参加するなど，初期のコングレスで活躍．１９１８年にはコングレスを脱退，National Liberal Federation を設立．

6　大体　，十月上旬に始まる．

7　生徒懲罰の一で学生に罰金を支払わせるもの．今日も行われている．校長の権限で金額も決められる．

9　試　験　不　信

文学士課程に入ってから考え方が変わった．試験にあまり興味がなくなり，勉強以外のことにも目を向けるようになった．子供時分から教室では授業をできるだけ注意深く聞き，教室での時間を少しも無駄にせぬ習慣がついていた．このようになったのは家庭教師をつけてもらっていなかったためで，すべて学校の先生に頼っていたのがそのうちに習慣になってしまったわけだ．大学に入ってからも同じことだった．入学と同時にどの科目の特別コースを受講するかを考えねばならなくなった．当時，文学士課程では３科目を履修しなければならなかった．そのうち英語と哲学とが必修で残りの１科目は学生が選択してよいことになっていた．しかし，その選択科目も必修科目と同様に履修し，試験に合格しなければならなかった．私は歴史と経済学とを選んだ．当時，特別コースには普通コースで読むもののほかにも若干のものを読まねばならず，試験も別になっていた．このように特別コースの試験は難しく講義も多かった．また，学生の希望によって一つ以上の学科で特別コースをとってもよいことになっていた．私が当面した問題というのは２科目で特別コースをとるか３科目にするかということだった．私はどちらとも決めずに３科目の特別コースの授業に出た．

同級のラーマーヌグラハ君は予科の間，チャプラーのカレッジで学んでいたが，文学士課程ではプレジデンシー。カレッジに入ってきた．彼が３科目全部の特別コースをとって☆P.117 文学士課程での試験の成績に応じて２種類の奨学金がもらえるようになっていた．一つは月額５０ルピーのもの，もう一つは同じく４０ルピーのものであった．その際，特別コースの点数も加算されることになっていた．従って同君は，３科目で特別コースをとろうと考えたわけである．しかし，時々２科目を特別コースで履習する者の点数のほうが３科目履習者のものよりも多いことがあったりする．その

場合は2科目履習者のほうが奨学金をもらうわけである．私は3科目について特別コースをとろうとすると大変な勉強をしなければなるまいと心配になった．しばらくはどうしたものかと迷いながらも3科目の授業に出席していた．たまたま哲学の教授の教え方が私にはさっぱり面白くなかったのでいやになってしまった．ところが英語のパーシヴァル教授と歴史のビナエンドラナート・セーン教授の授業振りは素晴らしかったので，私には興味があった．

私は英語，歴史，経済学で特別コースをとることに決めた．私以外にはラーマーヌグラハ君ともう一人の学生の2人だけが3科目の特別コースを履習していた．間もなくP．K．ラーイ博士が哲学を教えられるようになった．先生の教授法はとても素晴らしく魅力的だったので，私は哲学が一番やさしい科目だと思うようになった．講義が立派なのでよく注意して聞けば参考書もあまり読まなくてもよいほどだった．試験は全科目合格しなければならぬのはもちろんだが，さきにも述べたように奨学金の決定に当たっては特別コースの試験の成績が加算されるので自然そのほうに注意を向けるようになる．それで私は哲学についてはラーイ博士の授業を受ける以外あまり注意を払わなかったのだが，あまりにも立派な授業なので私は参考書も読まずに試験に合格するだけの知識を得ることが出来た．もし哲学を履習していたらさほど苦労せずに第3科目の特別コースもとれたのだがと残念に思ったことである．

このようなことでしばらくは懸命に勉強したのだが，あるきっかけで試験の成績に興味がなくなり勉強以外のことに注意を向けるようになった．その頃，サティーシュチャンドラ・ムカルジー氏が学生を会員としたドーン・ソサイティー（Dawn Society，曙会）という会を設立しておられた．会費などは一切不要で，学業面での指導をすると共に学生の品行を正し，母国に関する認識を深める手助けをすることが会の目的とされていた．学生に奉仕活動をさせることがあり，それがこの会の教育の一環とされていた．週に2度夕方に授業があり，講義が行われることになっていた．講義の一つは様々の問題について，もう一つは『バガヴァッド・ギーター』[1]についてのもので，『ギーター』のほうは一人のパンディットが担当し，とてもやさしく説明していた．前者のほうはサティーシュチャンドラ氏自身の担当であったが，外部の人に講演してもらうこともあった．あるカレッジの校長をしておられたN．N．ゴーシュ氏とかシスター・ニヴェーディター[2]，その他の人々が時折来演された．会には遅刻せぬよう行かねばならず，出席簿もつけられていた．講義の開始前に鉛筆と紙とが全員に配布され，受講者は講義の要点を書き留めるのであった．二つの講義の要約を書いたものを閉じ込む紙挟ももらっていた．サティーシュ氏はその紙挟を自宅に持ち帰って読み誤りを訂正し，一人ずつ呼び寄せてその誤りについて説明を加えられるのであった．講義の内容は大いに参考になるもので，インドや世界についての認識も増し品行にも感化を及ぼすといったものであった．講義を聴きとったノートをもとにもう一度自分の言葉で表現してみる訓練はあらゆる意味で為になることだった．大学の試験にも役立つ．年度末にはサティーシュ氏はその紙挟をだれか偉い人のところへ提出される．その偉い人がその中から最優秀のものを選んで奨学金と賞品を授与される．積極的な奉仕活動というのは国産の衣類などを売る小さな店があり，その店番をすることだった．夕方2時間開店するもので売ったり勘定したりするのは会員に任されていた．

なにがきっかけだったか憶えていないが，ともかく私はその講義を聞きに出かけて行ってみたところすっかり気に入った．私もそれに参加して今日に至るまでサティーシュ氏に目をかけていただくようになった．サティーシュ氏はアーシュトーシュ・ムカルジー氏[3]と同じ年に文学士になられた優等生の一人である．学生時代にはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの友人でもあった．弁護士になられたのだったが，間もなく廃業され，このような公共活動に従事しておられた．結婚なさらず学生の生活を改める必要ありとして，このドーン・ソサイティーを設立されたのであった．それにはN．N．ゴーシュ，シスター ニヴェーディター，グルダース・バナルジー卿[4]等，当代一流の人々の協力があった．会に通うようになって同級生はなかったが，大学で名の知られていた学生たちと親密になった．著名な学者で著述家でもあるヴィナヤ クマール・サルカール氏，リポン・カレッジの校長を勤め，数年前に亡くなったラヴィーンドラ・ナーラーヤン・ゴーシュ氏などである．

年末にはドーン・ソサイティーの奨学金も賞も私がもらうことになり，会の席上，グルダース・バナルジー卿から激励の言葉までいただいたのを憶えている．私は会に参加するようになって思考力を練られた．試験への信頼は失せて，公共的なことに注意を向けるようになった．もともと私は子供の頃からそのようなことに興味を抱いていた．チャプラーの学校にいた頃，弁論クラブをつくり，日曜毎に集まっては論文を読んだり弁じたりした．それには先生も招待することにしていた．このクラブは学校内のクラブではなくて独立のものだった．同じようにカルカッタでもビハール人クラブ（Bihari Club）を結成し，毎日曜日に集まっては論文を読んだり弁論をふるったりしていた．そのほかカレッジの自治会にも加わり，一年間会長をしたこともあった．また，この自治会が出していた月刊誌の運営にも加わっていた．

しかし，こういったことは，ドーン・ソサイティーに加わるまではこれといった特定の目標もなく，体系的な計画があったわけでもなかった．新聞を読んでコングレス（インド国民会議）の存在は知っていた．コングレスの年次大会での講演の報道は注意深く読むことにしていた．もっとも，どのようなものであれ，公共的な集会にはたとえば，スレーンドラナート・バナルジー氏の如き高名な人たちの演説があるとそれを聞きに出かけていた．だがむしろドーン・ソサイティーのほうに興味が強かった．私はまだ大学に入っていなかった時分に国産品愛用に兄が眼を開いてくれていたのだが，まだ十分なものとはいえなかった．このドーン・ソサイティーとサティーシュ氏に感化されて，萌芽状態にあって，目的もなく理解もなくして暗中模索していた思考や精神活動がいくらか磨きをかけられたのであった．私はようやく将来のことも少し考えるようになったのである．

(註)

1　Bhagavadgītā　―　サンスクリット語の大叙事詩マハーバーラタの一部とされる，ヒンドゥー教徒の聖典．近代インドの多くの思想家や政治家が註釈書を著している．

2　Sister Nivedītā　―　英人教育家，本名，（Miss）Margaret E. Noble．Swami Vivekanand の弟子となり１８９８年に渡印，インドの女子教育の振興に献身．

3　Asutosh Mukharjī　―　１８６４年生まれ，カルカッタ高裁判事，カルカッタ大学評議員，

１９０６年カルカッタ大学副学長となる．

4　Gurudās Banarjī　―　１８４４年生まれ．弁護士，法学博士．１８８８年カルカッタ高裁判事，１８７８年カルカッタ大学評議員，１８９０―９３年カルカッタ大学副学長をつとめる．

１０　ベンガル分割

１９０４年に私は予科の卒業試験に合格した．１９０５年にベンガル分割反対運動が始まった．それまでも私は公衆の集会には必らず出かけていた．ベンガル分割反対の集会にもよく参加した．その頃はまだ集会に対する干渉や抑制といったものはなにもなかった．外国製品のボイコットと国産品普及を決めた１９０５年８月７日の大集会には私も加わった．皆が国産品の愛用を誓ったのであるが私にしてみればそれは少しも難しいことではなかった．というのは，かなり以前から国産品ばかり用いてきていたからである．この運動はずいぶん強力なものとなり，毎日のようにどこかで集会が開かれるといった有様だった．私たちもみな参加した．スレーンドラナート・バナルジー氏やヴィピンチャンドラ・パール氏[1]時にはＡ．チョウドリー氏[2]とかオロビンド・ゴーシュ氏[3]の演説を聞くのであった．寮の学生たちの間にも大きな関心をよんだ．これまで一度も国産品を用いたことのなかったようなものが国産品を用いるようになった．年配の人たちのことはさておき，学生たちは情熱に燃え，大いに意気込んだ．

事件というほどのことでもないが，一つ書き留めておきたいことがある．かねてから私は国産品愛用を続けていたのだが，授業の際に不便なことがあった．講義は毎日ノートにとるのであるが，鉛筆でとると消えてしまう心配があるので，ペンとインキ壺を教室に持込んで書いていた．ところがある日スタイロペン（鉄筆型万年筆）というものがあるのを知った．これはインキを入れておけばインキ壺を持ち歩く手間もない．これは外国製品でホワイトウエー・ラドローの店でその頃市価の半値で売られていた．私はそれを一つ買い求めた．寮の仲間たちは私がそれを買い求めたのを知ると大変憤り，私を問いつめ出した．私はその中の一人が舶来の便箋をたくさん持っているのを知っていた．別の一人は，最近，舶来生地で高価な洋服を仕立てたところだった．学生たちは日を定めて舶来の衣料を焼こうと相談し，その日寮の庭で舶来品を焼却することに決めた．皆は少しばかりの衣服を燃やせばよいと思っているだけで，舶来衣料全部を燃やそうなどとはだれ一人考えてもみなかったのだろう．各自かなりの舶来衣料を持っていたのである．

皆があまりしつこく咎めるので私は，「それなら今日各自のトランクを開けて，舶来の衣料が入っておればそれをみな燃やしてしまおうではないか．僕もトランクを開けてみて舶来の衣服が出てくればみな今すぐ火にくべてしまおう」と言った．皆は驚いてしまった．仲間たちはその万年筆のほかに私が舶来品を持っていないのを知らなかったのである．私がトランクを開けて一つずつ部屋中にひろげてみせたところ，集まっていた連中も散ってしまい，それからはこれまでのように私を咎めることもなくなってしまった．一人は新らしい便箋を火にくべたがもう一人の仲間は新調の洋服をその場で燃やしてしまわなかったと記憶する．もっとも，当時は二度と着ようとはしなかった．他の連中も似たようなことをした．

１９０５年はこのような大規模な運動と覚醒の年だった．特に学生たちは活気にあふれてきた．多くの者が勉学を放棄した．当時カルカッタでは民族教育[4]の大きな機関が設立された．サティーシュ氏もそれに参加されたので間もなくドーン・ソサイティーの活動も不活潑になった．この会の仲間もかなりそれに参加した．私はいろいろな会合や集会に出席して講演や演説を聴いていたが，学校をやめてまでその民族教育の機関に参加しようなどとは思わなかった．その目標が私には不明確であったことと，学校をやめて自分の将来の進路を根本的に転換するだけの心の準備が出来上がっていなかったからである．私は子供時分から臆病でとおしてきており，如何なる問題にせよ早急になんらかの思い切った行動をとることはいつも苦手であった．その時は行動に移る移らぬが強くのしかかってきたわけでもなかった．私の記憶する限り，国産品愛用運動とベンガル分割反対運動とに学校放棄の綱領は１９２０－２１年の時の運動のように結びついてはいなかった．このようなことで私は外に立って共感していたにとどまり，その中にまでは足を踏入れなかった．

しかし，このような運動が影響を及ぼしたのは勿論で，読書の時間が足りなくなり，試験の成績に対してある意味で無関心になった．試験は３月に行われることになっていた．　毎年９月から１０月にかけてはトゥルガープージャーとダシャラーの休暇があるわけだが，たいてい１ケ月以上にも及ぶものだった．その年は私はカルカッタに留まった．少し勉強しなければ合格が危いと思ったからである．

カレッジ内の試験があった．その試験に失敗するかも知れぬなどとは考えたこともなかった．もっとも人よりも点数が悪いかも知れぬとは思ってみた．仲間たちと話し合ったところ落ち着いて試験準備の出来るように，試験の前に６～７週間どこかよそへ行ってみようということになった．ビハールのサンタール・パルガナーのジャームターラーという所へ行くことに決め，仲間の一人がそこに小さな家を一軒借りる手配をした．カレッジ内の試験が済むと成績の発表も待たずにそこへ出掛けた．

私が経済学及び政治学で英語と歴史も含め特別コースをとったことは先にも触れたが，歴史の特別コースの試験官はパーシヴァル教授であった．先生は試験を早く済ませて点数も皆に知らせられた．私が一番で点数もとてもよかったが，他の学科についてはわからなかった．当時の校長は理科を教えていたので私たちとは授業での接触はなく，我々を個人的に知らなかった．校長は，教官は学生に試験の成績を知らせぬように注意していたのであるが，それよりも先にパーシヴァル先生は私たちに試験の成績を知らせてしまわれた．

私たちがジャームターラーへ発った後で試験の成績が発表された．校長はその発表の際に私について英語の特別コース受験は認めるが，歴史の特別コースのほうは認めぬと言った．その場に居合わせた友人たちは驚いてしまった．一人が思いきって，「プラサードは合格しております．」と言った．校長は，「合格していれば受験が許可されているはずではないか．」と答えた．その友人は再度，「全科目で一番になって奨学金をもらっているほどのプラサードがカレッジの歴史の試験に不合格になるなどあり得ぬことです．」と言った．校長は友人の言葉を反唱し，「全科目に一番になったから一番になり奨学金をもらったろうが，この試験に合格しなかったから大学の試験を受

けることは承認できん．」と言った．友人はもう一度，「私たちは試験の成績も知っておりますし点数も知っています．プラサードは歴史では最高点をとりました．」と強調した．すると校長は立腹し，「そういうことがあるはずがない．わしは，点数を知らせぬようにと指示しておいた．」と言い，さらに，「プラサードには特別コースの試験を受けさせない．」と大声で言った．「わしは点数を全部詳しく調べたのだから間違いはない．」と何度も繰返して言った．

友人は驚いて，すぐさまジャームターラーに出かけていた私に電報を打った．電報を受け取った私は友達以上に驚いてしまった．皆と相談したところカルカッタに戻ったがよかろうということになった．カルカッタに着くとパーシヴァル先生宅へ直行した．先生は大学者と認められており，その教授法も素晴らしかった．その学識と教授法に学生たちは心酔していた．独身で一人暮しで書物のみを友としておられた．とても潤いの乏しい気性で交際する人も親しい人もなかった．定刻に学校へ来て授業をおえ次第家へというのが日課だった．たゞ，大学の評議員などをしておられたのでその会合に出席されることはあったが，それ以外は自宅で研究に余念がなかった．自分の職務にとても厳格な人でプレシデンシー。カレッジで３０年近くも教鞭をとり，後にしばらく校長にもなられた．責務に忠実なことといえば教室であろうがどこであろうがわずか１分の時間も無駄にされることはなかったほどである．質素な身なりをしておられ，派手な服装の人を嫌っておられた．ひたすら教えることに没頭しておられた．しかし，先生の質朴。責任感の強さ。外見のとりつきにくさときびしさが私たちすべての学生に影響を及ぼしていた．私たちは先生を大変恐れていた．先生の家に訪ねて行った者は一人もあるまい．先生はご自分が試験官になられた試験はみなカレッジのものであろうと大学のものであろうと受験者の名簿をつくりそのつけられた点数を控えておくようにしておられた．だれか学生で就職等のために証明書を書いていただきに行くと，その受験年度を尋ね，御自分の控えておられる成績を基にして証明書を書き，翌日手渡されるのであった．そういうわけで先生の証明書は大変値打があった．

私は思い切って先生の家を訪ねた．恐ろしくはあったが止むを得ない．先生には２年ほど教わっていたので先生も私を知っておられ，早速，何の用かね，とお尋ねになられた．用件を申し上げると，先生はまだ試験が終わって間もなかったので成績を覚えておられ，「君は一番で，点数もかなり高かったと記憶するが，またどうしたわけだね．」と逆に問われた．電報をお見せすると，先生は手許の成績簿を取出して目を通し，「やはり私の記憶通りだ．君の得点は高いし，それに一番だ．私が書いて校長に手渡したのだから間違いはない．教務課でなにか手違いがあったのだろう．学校で私のところへ来なさい．」との御言葉であった．

私は生返った心地がした．指定された時刻よりも早目に学校へ行き，階段に立っていると先生は時刻よりも１，２分早く来られ，まっすぐ校長室へ行かれた．私の点数は誤まって他の学生のところに書込まれていたのがわかった．その学生は特別コースで最低点に満たなかったので不合格になっていたのであるが，その点数が私のところにつけられていたのである．校長はパーシヴァル先生に自分の誤りを認め遺憾の意を表わし，「学生には自分が間違っていたのであるから大学の試験は受けてよいとお伝え願いたい．」と依頼した．

私は先生が校長室から出てこられるのを今か今かと待っていた．先生は校長室を出られるとすぐさまいきさつを説明し，教室へ向かわれた．この騒動のために2日間を空費した．ジャームターラーとカルカッタの往復にお金もかかり，しばらくの間は大変な心配もしたというわけである．また，間違って私の点数がつけられていた学生はこのことがあったので特別コースの試験を受けることが出来た．誤りを訂正した時にはすでに願書は校長の署名と共に大学のほうに送付されていて，それを取消すことは出来なくなっていた．その学生は懸命に勉強して大学試験を受けたところ特別コースにも合格した．先にも述べたように高等科，予科，文学士課程の試験は三つとも受験の許可を得るのになんらかの困難が生じたわけである．もっとも，そのいずれにおいても大学施行の試験ではいずれにも首席になることはなったのであるが．

試験が近づいてくると私はあわてた．今度も一番にならなかったらまずかろうと思った．だが今度はあまり気乗りもせず，予科の試験の時のように十分な準備期間もなかった．成績順位は特別コースの点数によってのみ決まることになっていたので，特別コースの科目にだけ専念した．ただ普通コースをおえればよいだけの哲学はある意味ではなおざりにしておいた．以前にP．K．ラーイ博士の講義をよく注意して聞いていただけで書物は大して読まなかった．一度ふとした事があって元気づいたことがあった．というのは，ある日のこと，ラーイ博士が病気になられたので講義はなかったが問題を出して答案を提出するようにと命じられた．みな答案を書き上げて提出した．私は書物は読んでいなかったのでただ先生の講義で聞き取ったことを出来る限り書いた．博士は答案を家に持ち帰って調べられた．翌日その試験の結果が発表され，私が一番で，この哲学で特別コースをとっている学生よりも私の方の点数がよかった．それ以後哲学はあまり参考書を読む必要がないものだと思うようになった．

大学が実施する試験に先立って行われるカレッジ内の試験でも特別コースをとっている学生よりも成績がよかった．従ってジャームターラーで試験勉強をした時も哲学の準備はしなかった．いよいよ試験となり，英語の試験が終わった．次は哲学の試験だった．約2ケ月間，哲学の書物は1冊も見ていなかった．前日の夕刻，明日の試験はさっぱりできないのではないかと急に心配になった．そう考えると今まで覚えていたものまですっかり忘れてしまったように思えてきた．今さら本を読む時間もないので，夜ノートなどをもう一度復習すればなんとか合格点だけはとれるだろうと思った．哲学には心理学，倫理学，それに論理学の三分野が含まれていた．心理学のほうを調べにかかったが，例によって夕刻には寝てしまった．しばらくしてあわてて起き上がったが，今は寝て翌朝2時か3時に起きて全部を復習する方がよかろうと考えた．年老いた召使いがいたので2時ちょうどに起こしてくれるように頼んだ．2，3日来試験で大分疲れていたためにぐっすり寝込んでしまった．召使いは気の毒に寝もせずにいたが2時になったので起こそうとした．だが私はどうにもこうにも一向に目をさまさなかった．ようやく4時半頃に目が覚め時計を見てあわてふためいた．召使に腹が立ったが，召使いは，「何度も起こしましたのにお起きにならなかったのですから手前には落度はございません．」という．急いでノートをめくり心理学と倫理学の分には目を通した．この二つはラーイ博士が教えて下さったところでもある．しかし，論理学のほうを見る余裕はなか

った．心配になって友人のところへ走った．ありのままを話すと友人は論理学の各章の題目とそれぞれについて若干の要点を教えてくれた．その時の私にはなにか全くはじめてのことを学んでいるような感じだった．駆け足で戻ると１５分あまりで洗顔し，水浴びをしてごはんをかきこみ，また駆け足で学校へ行った．着いた時にはすでに試験は始まっていた．駆け込んで着席し，問題用紙を受取った．あまりあわてていたので一問でも満足に答えられるかどうかもわからないほどだった．もしこの学科で失敗すれば他の科目で特別コースをとったところでなにになろうと心配になった．一科目でも不合格になれば試験全部が不合格になるのであった．

問題用紙を受取ってから少し落着こうと努めた．ゆっくり問題を読んだ．第一問は答えられるように思えたので答案を書きにかかった．書きおえてみると答案はさほど悪くないような気がした．このようにして第二問，第三問と進み全部答案を書いた．ちょうど時間もいっぱいになった．これで不合格にはなるまいと自信を得てすっかり落着いた．半時間の休憩後，二枚目の問題用紙が配られたが，同じようにほとんど全問の答案を書いたが，一問だけ答えられなかった．それの答案も書けば書けぬこともなかったが完全には出来なかった．というのはその題目は私も見覚えのあるものではあったが，友人が簡潔に要点を言いかけたところで時間がなくなりそのままにして寮を出たためにそのままになった章から出たものだった．私はそれの答案は書かずに時間が終わる前に出て来た．これで不合格になる心配は全くなくなったと確信した．試験の成績が発表になったが，歴史の特別コースでは私が一番だった．英語でも特別コースをとったが一番にはなれなかった．哲学でもとてもよい点数がとれた．全科目の合計では私が一番になって月額５０ルピーと４０ルピーの２種類の奨学金をもらうことになった．今度の成績は努力の賜物でもなんでもなかった．私はなに一つ努力したわけではなかったのだから．

(註)

1　Bipin Chandra Pāl（１８５８－１９３２）　－　ベンガル出身の教育家，ジャーナリスト政治家．Ｂ．Ｇ．ティラク，ラージパト。ラーイなどと並んで過激派の指導者として活躍．

2　Asutosh Chaudhrī　－　カルカッタ高裁弁護士，同判事，ベンガル国民会議議長をつとめるなどした．

3　Arobind Ghosh（１８７２－１９５０）　－　教育家，政治家，思想家．ベンガル分割反対運動の際いわゆる過激派の代表的一員として活躍．その後，ポンディシェリーに移り，ヨーガの実修と著述に従事．

4　ベンガル分割反対運動の高揚に伴い盛り上がってきた反英運動は，教育を民族の主体性回復の重要な基盤として把え，官制教育に対抗し民族教育の振興にも意を注ぐようになった．

１１　海外旅行をめぐって[1]

１９０４年の夏，私が予科の試験を済ませて帰郷すると兄も帰ってきていた．試験の成績発表待ちであったが，そのころ，新聞でガネーシュ。プラサード博士が外国留学から帰国されることを知った．博士はわがサーラン県に接するバリヤー県の御出身で，博士の御母堂はチャプラーの御出

身であった．カーストはカーヤストであった．アラーハーバード大学で理学博士の学位をとって英国に留学され，さらにドイツへも行かれ数学で高名になっておられた．博士が帰国される前から博士のカースト復帰を認めるべきだとする運動が起こっていた．これをめぐってチャプラーのカーヤストは二派に別れた．一派が新進弁護士ブラジュキショール・プラサード氏を旗頭とするのに対し反対派は名門出身で知名な二人の老弁護士を指導者としていた．ブラジュキショール氏は私の家を訪れられた．同氏は兄と相談の後，父に，ガネーシュ博士のカースト復帰を認めるよう，また，博士宅で催されるカーストの会食には是非出席するよう依頼された．

その頃までビハール全体で海外へ行って来た人と言えば，サッチダーナンダ・シナー[3]氏だけだった．シナー氏は帰国されてすでに１１，２年経っていたが，やはり帰国された際にはちょっとした騒ぎがもち上った．しかし，シナー氏は懺悔式をして旧式のカースト制約を認めることを拒否されたために正式にはカーストへの復帰が認められなかった．ガネーシュ・プラサード博士は帰国前の交信で，カーストの制約を受け入れられることに決まっていた．博士は外国でもとても質素な生活をされ，肉・魚・酒などを一切口にされなかった．博士と改革派の人々はこうする以外に現在海外渡航への道を開くことはできないと考えていた．シナー氏の帰国後１０年間はだれ一人その禁を破ってまで海外渡航をする勇気を出した人はなかった．従ってこの飲食に関する条件を飲んでも海外渡航の道を開く必要があったわけである．

ブラジュキショール氏は幾人かの人にガネーシュ博士の家での会食に出席するよう説得して，私の父にも強く出席を懇願した．父は自分自身が出席することは断ったが，私たち二人の息子を出席させることには同意した．

博士は帰国され，バリヤーでの会食の日取りも決まった．ブラジュキショール氏に誘われてチャプラーから私たち２０人あまりの者がバリヤーへ行った．その中には私たち兄弟と，親戚のジャムナー兄とガンガー兄の２人も入っていた．村のパトワーリーもいた．私たちはガネーシュ博士にお目にかかった．バリヤーのカーヤストの間では大変な騒ぎになっていた．

前にも記したように私の先祖は昔バリヤーに住んでいたが，同地には同じゴートラの人が住んでいた．私の家の婚礼と法事の際には祭司は今でもバリヤーからやってくる．私の家内の里もバリヤーである．親戚の者のうち弁護士をしている者も幾人かいる．もっとも他の職業に従事している者もいた．私たちがやって来たことはすぐに知れわたった．それをかくしておくわけにもゆかなかった．私たちの従兄にあたる人も弁護士だったが，その人が会いに来て，会食に参加することに反対した．私たちが父の許可を得ずに来ていると考えてのことだったのだが，そうではないことを私たちの口から聞くと一層落胆して，「おじさんは，こちらに住んでいる者の身にもなっておれたちに相談してくれればよかったのだが．」と言った．

同じく私の妻の実家の者もこの件については強く反対だったのだが，無理強いはしなかった．晩に宴会があり，会食をすませると各自帰路についた．ガネーシュ博士は最初イラーハーバード大学で後にバナーラス・ヒンドゥー大学で数学科の主任教授を勤め数年後に亡くなられた．その時はじめてお目にかかったことをいつまでもお忘れにならず，私にとても好意を寄せて下さった．

私はチャプラーから少しはずれたところに嫁入っていた二番目の姉の家へ直行した．特に訪ねてみようと思ったわけではなかったが，それまで3，4日泊まって行くようにと言われていたのとチャプラーからは交通の便もよかったので家へは戻らずに立寄ったようなわけである．

ところが，その会食に参加した者の氏名が新聞に掲載されたのでチャプラーでは大騒ぎになった．出席者をカーストから追放しようとする動きが起こり，海外渡航反対のためカーシーの大学僧シヴァクマール・シャーストリー師の裁定を仰ぐことになった．また，全県下のカーヤストの大会議[4]を開催する計画が進められた．私はそのようなことはなにも知らずに姉の婚家に厄介になっていた．この間に試験の結果が発表になり，官報を見たブラジュキショール氏がジーラーデーイーに通報してくれた．兄がその知らせを受取り，父も大喜びした．父は早速祝いにバラモンに☆P. 117御馳走を出し，カーストの会食を催す手筈もした．これらはすべて私の留守中の出来事である．

私は姉婿の家からジーラーデーイー村への帰途，チャプラーへ出た．義兄もチャプラーへ出たが，チャプラーでは大騒動がもち上がっているのを知らなかった．私たちは夜中にチャプラーに着き床についた．従ってその夜はなにも知らなかった．試験の成績も判らなかった．朝早く出る汽車に乗ればジーラーデーイーへ行けることになっていたので，早朝駅へ行った．ブラジュキショール氏は駅の近くに住んでおられたので私は召使に命じて試験の成績が発表になったかどうか尋ねに行かせた．するとブラジュキショール氏は成績は発表になったが，是非会いに来るようにと言付けられた．成績を知りたかったのでお宅へ伺ったところブラジュキショール氏は私をひき止められた．裁判所は朝7時に始まるので私もお伴した．義兄は私が途中でこのように立ち止まったのを知らなかった．ブラジュキショール氏と文庫へ行くと弁護士たちが幾人も私をとり囲んだ．試験の成績を祝ってくれる人もあれば，ガネーシュ博士の会食の模様を尋ねる人もいた．会食に出席したのはだれだれか，私がどこから来たのかなどと尋ねられるので私はすっかり話した．おまけに，数日間，バイガー町の姉婿の家に泊まり，今その帰途にあるのだとも話した．このように本当のことを話したためになにかまずいことが起きようとは夢にも思わなかった．

実は会食に参加した人のうち幾人かが反対運動に震え上がってしまい，また，家族の圧力で会食に出席したことを否定し，新聞に出た記事は間違っていると話していたのである．裁判所の文庫に来た義兄も質問を受けた．義兄は私がガネーシュ博士の会食に参加したのを知らなかったし，まだジーラーデーイーに戻らずチャプラーに立止まって，同じ文庫の中で他の人たちと話しているのも知らなかった．古参の著名な弁護士たちの言葉を聞いて義兄はいささか縮み上がった．義兄は私に代ってそれを否定し，もし私が会食に参加していたのなら私が知っていた筈だと言った．そこで皆が，いや，プラサードは今そこにおるし，つい先刻プラサードの口から会食の模様を聞いたところだ，と言った．そこで二人を会わせようということになったが，その時は私はブラジュキショール氏の家に行ってしまっていた．村に帰ってみると，その前日に祈禱などの儀式があり，バラモンへの馳走やカーストの会食が済んだところで，その会食には同じ村のカーヤストばかりでなくいつもカーストの会食のある時には参加している近くの村のカーヤストも参加したということを知らされた．村の中ではなに一つ困ることはなかった．というのは村の中のカーヤストはわずか三軒だっ

とし，どの家からも件の会食に出席していたからである．私はチャプラーの様子を兄に話した．また，チャプラーで開催されるカースト会議には我々の同調者を送りこんで海外旅行承認の提案を認めさせなくてはならぬとのブラシュキショール氏の言付けも伝えた．

チャプラーではカースト会議の準備万端がととのえられた．県下のカーヤストが招集され，カーシー（バナーラス）からはシヴァクマール・シャーストリー大学僧が裁定を下すために臨席することになった．また，会食に参加した人たちに会食したことを否定するか懺悔式をさせるかのいずれかを選ばせようとの動きが始まった．私たちは集会の時にチャプラーに行かなかったが，大変な人数が集まったということである．県は二つにわかれていた．県東部は二人の反対派の著名な弁護士の側につき，県西部は私たちの住んでいた地方だが承認派であった．反対派が多数派であった．私たち少数派の者は殆んど西部チャプラーの人で，私の家はその中では名門ということになっていた．チャプラーでは，あるカーヤストの建立になる一番大きくとても立派なパンチ（マンディル）寺で会議が開かれた．長老の著名な弁護士が議長になる予定だった．集まったところで私たちの派の一人が立上がって弁護士のサラスヴァティプラサード氏を議長にするよう提案した．この方は会食に参加した人で，西部の出身だったが，仕事はゴーラフプルでしておられた．幾人かの人がこれに賛成した．会議を招集した人はいささか動揺した．前もって長老弁護士の名前を議長として通知書に刷りこんであったのに居合せた改革派（賛成派）の人たちがサラスヴァティープラサード氏を議長にせよと騒ぎたてたのである．他の人たちはこのような反対が起ころうなどとは予期していなかった．皆自分たちの仲間だと思っていた．事実，その集会へ来ていた人の大多数というより殆んどは海外渡航反対派の人たちであった．しかし，その人たちはかなり動揺した．そこへ一方からは議長の選挙をすべしとの意見が出されたので一そう不安になってきた．前もって発表されていた人を議長にすると言って選挙に応じなかったところ，改革派の人たちが議長席につめ寄ったために，サラスヴァティープラサード氏も進み出て，「会議が私を議長に推しましたから私が議長に就任します．あなたには議長席を占める資格はありません．」と宣言された．そのため予定されていた議長は一段とあわてて，「この人たちは会議を開かせないのでこの集会は解散することにします．」と宣言した．

改革派の人たちは大喜びですぐに立上がり，「勝った．勝った．」と叫びながら立去った．改革派にしてみれば，これは予定の行動だった．もしも本当に採決をとろうものなら負けるに決まっていたからである．その日の集会はこのようにして散会になったが，その翌日☆P.117会議が開かれた．その際，会食に参加した人はカーストから追放するとの決議をした．飲食，婚姻などすべてについて関係を断絶されることになり，その人たちの名前を刷り上げたものを県全体に配布する手筈まで整えられた．改革派からは，その会は全員の参加したものではなくて，改革派が居なくなってから翌日決定されたものであるからその決議を承認しないし，全県の人も承認しない．もし本当に承認するというのであれば全県の人を集めて決議せよ，と主張した．このような騒ぎのうちに新聞には両派の意見も発表された．結局，カースト追放もあまり強力なものとはなり得なかった．

私たちに関する限りカースト追放は何の問題もなかった．私たちの周囲の人はみな飲食を共に

し，バラモンや祭司もなにも不都合な事態に発展しないようにしてくれた．もっとも父は一度少しつらいおもいをした．前にも言ったように私の姉婿はチャプラーの近くに住んでいたが，その近辺ではカースト追放処分が若干厳しく行われていた．チャプラーの人たちは義兄に強要して一度父に非常に不愉快な手紙を書かせたことがあった．ある人が手紙を持って来た．私たちが会ったが，その人は，御尊父に手紙を届けに来たのであってあなた方には用はない，と言った．私たちはこの件についての書簡だろうと推察した．父は手紙を読んで少し怖気ついたようであった．私たちには一人しかいない姉婿であった．もう一人の姉はずっと以前に未亡人になっていたのである．義兄にも子供が一人もなかったので夫婦二人きりだった．他には兄弟も親戚もなかった．身内の者はみな私たちの一派だった．義兄は，父に宛てて，俺かに親戚縁者とてないのに今度のことで私たちとの縁も切れてしまう．縁をつないでおこうと思うのであれば，会食に参加したのを否定すると宣言するか懺悔式をするかしてくれるようにと書いて寄こしたのであった．

父は驚きはしたものの私たちがなにか間違ったことをしでかしたとは思わなかった．ただ，父は，もし私たちがその会食に加わらずにこの紛争にまきこまれていなかったら改革派のためにもっと有効に働きかけることが出来たかも知れぬと話した．母はこのような手紙が来たと聞くと，「否定するなどとんでもない．全くの嘘ではありませんか．そんなことしたってよいことはございますまい．もっとも，懺悔式のことなら，折を見て考えてもよろしゅうございますが．」ときっぱり言った．

このような趣旨の返事を出した．その時分は姉が里帰りすることもなかったので話はそのままになった．訴訟があったので父はチャプラーへ出掛けた．世話になっていた弁護士というのが例の長老で反対運動の指導者であった．弁護士は懺悔式をするよう強く説いたが，父は息子たちはカルカッタに出ていっておりますので，戻って来たら相談してみましょう，と言ってあしらった．

この人たちは出来るだけ間接的な方法で働きかけ，また，公共集会を開催しようとも企てた．私たちの村の近くのシーワーンで集会が催され，チャプラーでの決議が発表されることになった．チャプラーからは，会食に参加したシーワーンの人をカーストから追放するとの決定を集会で宣言するために一人が派遣された．しかし，シーワーンの多くの人は私たちと同意見であった．それにはわけがあった．ブラジュキショール氏，サラスヴァティープラサード氏，それに私たちはみなこのシーワーン地区の住人であった．その集会で私たちはチャプラーでの集会を承認しないこと，また，シーワーンのカーヤストはわが方の味方であるとの声明を出した．

私たちの村の二人，すなわち，私たちと一緒にバリヤーでの会食に参加したジャムナープラサード兄とガンガープラサード兄はチャプラーの学校で学んでいた．二人は他の学生たちと一緒に同じ家に住んでいたので，少し辛い目にあわされた．同宿の学生たちは二人の触れたものを受取らず，食事も一緒にはしなかった．バラモンの料理人も食事を別々に調理して出すのであった．二人はこの侮蔑を喜んで忍んでいた．このようなことが幾月か続いたが次第にゆるんで行き，旧に復した．チャプラーの反対派の中心人物も海外旅行に賛成派の人々と縁家になったりした．また，その人たちの家族の中からも海外渡航に賛成する人が出たりした．一度破られた制約は元へは戻らなかった．

カーヤストの海外渡航への道はここに開かれたのであった．

(註)

1　海外での生活で食事やカースト規律が守られぬことや守る上での困難から海外旅行が禁ぜられるようになった．この禁を犯した者がカーストに復帰するにあたっては懺悔式を行い，パンチャガヴィヤ（牛乳，ギー，ダヒー，牝牛の糞尿を混じたもの）を飲んだり，罰金を支払ったりしなければならなかった．この問題はマハートマー・ガンディーの留学に際しても生じている．

2　Bhoj　―　飲食に関するカーストの規律は甚だ厳しい．異カースト間の会食はもちろんこの場合のようにカーストの禁を犯した者との会食によってもカーストから追放されることがあった．ここでは海外旅行の禁は犯したが，カーストの規律を実質においては守ったということでカースト復帰を公認しようとする立場を指している．

3　Sacchidananda Sinha（1876――）弁護士（カルカッタ高裁，アラーハーバード高裁），Hindustan Review 誌刊行，中央立法院議員などをつとめた．

4　カースト制度に関する問題につきカースト成員が会合し裁決を下す．一地方，一地域に限られたものと全インド的なものとがある．ここに言及されているように海外渡航の禁を墨守しようとするなどの保守的な会議もあったが，冠婚葬祭に関する陋習を改革しようとするような会議が開かれることもあった．

12　学生会議とコングレス

文学士課程の卒業試験に合格したので私はカルカッタで文学修士課程と法学士課程に進んだ．当時は国産品愛用運動（スワデーシー）が非常に盛んであった．私たちビハールからカルカッタへ出てきていた学生の一部もその感化を受け，ビハール・クラブに出入りしてはよく議論したものだった．ベンガル人の学生たちがこのようにスワデーシーの普及運動に参加しているのを見てわれわれビハール人学生もなんらかの組織があれば，それを介して国産品の普及に一役かうことが出来るのだがと刺戟を受けた．私たちは歌を一曲作り，それを刷りものにしてあちこちへ配布したりした．しかし，それを配布する際にも組織力の欠如が一層強く感じられた．

私たちはビハール人学生の会議を招集してみてはどうだろうかと考えて，ビハール・クラブでこの趣旨の提案をしてみた．すると学生ばかりでなく，先輩からも熱烈な支持を受けた．私はパトナーへ派遣され，まず学生たちと会い，次に先輩と会った．先輩の中ではサッチダーナンダ・シナー氏とその頃のビハール・タイムス紙の編集長をしておられた故マヘーシュナーラーヤン氏が重立った人であった．みな賛意を表明してくれたので，パトナーで第一回の会合を開催することと高名な弁護士のシャルフッディーン氏[1]を議長にすることが決まった．パトナーの学生たちは歓迎委員会をつくって万全の準備をしてくれた．

第一回会合はパトナー・カレッジの大ホールで開かれた．ビハールのすべてのカレッジをはじめ，カレッジ以下の多数の学校の学生たちが熱心に参加した．会議の趣旨を説明する任が私に与えられたので，長文の演説を英語で書き，それを読み上げた．他の人たちも英語で演説した．この会

合の際，まずカレッジのある都市部にこの協会との連絡を保つ学生会議を設立し，次にそれを下級の学校のある地方に及ぼすことが決定された．会則も長文のものが作成され，それに基き全ビハールの学生を代表するものとして常任委員会がパトナーに設置された．これには各地の学生代表が委員として編入された．この委員会が加盟しているすべての学生会を統轄するものであり学生会議の活動を一年を通じて推進するものであった．

会則作成にあたり2点に議論が集中したのを記憶している．第一にはこの（学生）会議が政治に関与するか否かについてであった．これについては学生自身の間で意見が大きく対立していた．先輩はみな政治に関与するのに反対であった．結局，この会議は，民族主義的なものであれイギリス支配支持のものであれ，あるいは，その他如何なる形のものであれ政治運動には一切関与しないということに決まった．今になって思えばこのように決めたことは賢明であった．ビハールはベンガル州に属しており，当時まだ分離していなかった．教育は大変立遅れていて，公共活動の面は無にも等しかった．特に学生は外部のことをなにも知らぬ有様だった．コングレスに加わっている人もわずかで，まだ政治的な団体も別個に存在していなかった．ビハール独自のコングレスの支部があるわけでも政治団体が結成されていたわけでもなかった．たとえ若い学生たちであったにせよ，ビハール全体の人々が独自に会合し自分たちの問題を考えるために集まったのは初めてのことだった．このような状況にあったのだからもし慎重に歩を進めていなかったならばこの組織は存続することは出来なかったろう．

それまでインドのどこにもこのような学生会議は結成されていなかった．私たちはこのようにして前例もないような新らしい団体を組織しなければならなかったのである．意見の別れた第二点というのは単にビハールの学生だけの組織とするか，ベンガル人学生をも含めたものにするか，ということであった．これも激しく意見の対立した点であるが，数年にわたり年次総会の際にベンガル人学生の加入も許可すべしとの提案がなされたが，ついに承認されなかったことを憶えている．会の名称は最初からビハール学生会議であった．数年後，「ビハールの学生」とはビハールにおいて教育を受ける学生全部を意味すると会則に追加された．私たちカルカッタから加わった学生は最初からこの考えであったのだが，他の学生たちはそれに反対であった．

組織化はとても立派に行われた．ほとんどすべての都市に支部が結成され，カルカッタではビハール・クラブがその支部になった．バナーラス・ヒンドゥー大学が設立されてからは同大学にもビハール出身の学生がこの学生会議の支部を結成した．各支部はたいてい毎週会合を開き，学生はいろいろな問題についての論文を読んだり，演説をしたり，スポーツに参加したりした．そのために各地にクラブがつくられた．年次総会では論文や弁論のコンテストも開催され，最優秀のものには賞品も授与された．カレッジの学生とは別に，高等学校の生徒の部と女子の部とがあった．女子には論文や弁論のほかに，裁縫などの奨励の意味で別の賞も設けられていた．このようにして活動は年中続いていた．年次総会は毎年ダシャラーの休暇にビハールのどこかの都市で開催された．年次総会にはビハールやビハール以外の地域から著名な人に議長として出席していただいた．たとえば，ビハールの人ではシャルフッディーン氏，ハサン・イマーム氏，サッチダーナンダ・シナー博

パラメーシュワルラール氏，ディープナーラーヤン・シン氏，ブラジュキショール・プラサー氏などである．外部の人の中にはアニーベザント女史[2]，サロージニーナーイドゥー女史[3]，マハートマーガーンディー，C．F．アンドルーズ氏[4]などがあった．

この会は１９０６年に設立され，年次総会は非協力運動の始まった１９２０年まで続いた．その後はこの学生運動に熱心な学生たちが非協力運動という一段と大きな運動に従事するようになったため幾分沈滞した．もっともう一度甦えらせようとの努力もなされたのであるが，かつての活気は戻らなかった．今日存在するものはある意味で新らしい組織であってその活動に携っている人たちも恐らく結成当時の経緯については知らないだろう．その最盛期にはビハール全域の学生が熱心に参加した．これによって学生たちは団結を実地に学び，多くの者は演説術を学んだのであった．この１５年の間にビハールに現われたはつらつとして意欲に燃えた青年はすべてこの会に熱気を吹きこまれたのであった．皆が自分のこと以外に母国の事情や外国の事情をいくらか学び，また奉仕の精神もいく分か会得したのであった．学生たちが学びとったものは国に利益をもたらした．マハートマー・ガーンディーがビハールを訪れられた時も，以前この学生会議で活動した人たちが参加したのであり，非協力運動に加わったのもみなこの学生会議の成果であった．今日，州の指導的な仕事に従事している人たちの大半はこの学生会議の洗礼を受けている．

非協力運動は学生たちに非常に多くの犠牲を要求した．ビハール学生会議にはそれに対する備えができていたわけではない．決議は通ったのだが，ごくわずかの学生しか最後までその運動の試練に耐えることができなかった．それに耐えた者の大半はこの学生会議の活動家であった．弁護士層からこの運動に加わった人の多くもこの学生会議の委員をしたことのある人たちだった．１９２０年までこのようにその任務を果たしてこの会はあるかないかの存在になった．ある意味ではその任務を終了していたのである．全ビハールに覚醒をもたらし新生命を吹きこみ，将来に備えて畑を耕し種を播いたのであった．その結果は非協力運動に現われ，今日もなおビハール州はそれを享受しているのである．

１９０６年１２月にコングレスの年次大会がカルカッタで開催されることになった．コングレスについてはそれまで読んだり聞いたりしたことはあったが，それを自分の目で見る幸運にも好機にも恵まれていなかった．１９０５年大会がバナーラスで開催された時には文学士課程の試験に追われていたので，近いところではあったが行けなかった．私は１９０６年の大会にはじめて奉仕団員の資格で参加した．コングレスの大会は非常に活気に溢れており，すでに過激派と穏健派[5]とが出現していた．過激派の指導者と目されていたのがロークマーニヤ・ティラク，[6] ラーラー・ラージパト・ラーイ[7]，ビピンチャンドラ・パール，オロビンド・ゴーシュ等の諸氏であり，穏健派はフィーローズシャー・メーフター卿[8]，G．K．ゴーカレー氏[9]といった面々だった．私の理解した限り，スレーンドラナートバナルジー氏とマダンモーハン・マーラヴィーヤ氏[10]がこの両者の中間に位置していた．この両派の対立を軽減，もしくは，解消するためイギリスからダーダーバーイー・ナオロジー氏[11]が呼び戻され，議長就任を依頼された．幸い私は議場の当番を命じられたので議事委員会の討論を全部聞くことが出来た．大会の初日は議場からちょっと離れたところに行かされ

たので議長演説は聞けなかった．多くの奉仕団員がその持場を離れて会場の中に入って行くのを見たが，私はよからぬことと思い指示された位置についていた．サロージニー・ナーイドゥー女史，マーラヴィーヤ氏，それにジンナー氏の演説はこの会議で初めて聞いた．大会ばかりでなく，同時に開催された博覧会も大変な盛況だった．この大会を見てコングレスへの信頼が増したが，あと数年間はそれに正式に参加する機会は得られなかった．正式に参加したのは１９１１年のカルカッタ大会が最初で，それ以来全インドコングレス（国民会議）委員会の委員を勤め，今日に至るまで及ばずながらその仕事をしてきているようなわけである．

当時はコングレスの組織はいささか力を欠いていた．ビハールではこれに参加している人はほんのわずかであり，その大半は弁護士であった．ベンガルの州委員会とは別個の州委員会が１９０７年か１９０８年に発足していた．ビハール州がベンガルから分離したのは１９１２年であるが，この州委員会はあまり組織立ったものにはなっていなかった．代表といってもなんら正式に選出されたわけでもなく，会合があるとそこで幾人かの人が選出されるというような具合だった．その人たちが年次大会に出席すればそれでよし，もし出席できなければ，委員長はだれでも出席した人を代表として認め，その人に代表としての証明書を出すといった有様だった．このようなことでビハールの代表が欠けることはなく，毎年幾人かが大会には必らず出席していた．出席した代表が当時の規則に従って全インド・コングレス委員会の委員を選出するという仕組になっていた．私は１９１１年にこのようにして全インド・コングレス委員会の委員に選出された．コングレスのためにこれといった仕事をしたわけではなかったのである．その年に私は初めて代表となったのであったが，学生会議のことと大学の試験での成績がよかったことでビハールの人はみな私を知っていた．皆は一足飛びに私を全インド国民会議委員会に送りこんだのである．こういったことは１９２０年以降かなり変更されたが，このことについてはいずれ後で触れることになろう．

(註)

1　Sharfuddin　―　１８５６年生まれ，パトナー高裁判事，ビハール行政院議員，カルカッタ大学評議員などをつとめる．

2　Annie Besant（１８４７－１９３３）　―　アイルランド人．神智協会の会長，教育家としてインド人に自国文化の高遠さを認識させた．後に民族運動に参加．

3　Sarojini Naidu（１８７９－１９４９）　―　マドラス出身，初め英語の詩作により著名．民族運動に参加，指導者となる．独立後，北部州（U．P．）知事となる．

4　Charles F. Andrews（１８７１－１９４０）　―　イギリス人宣教師．ガンディーの南アフリカ以来の支持者，協力者として活躍．

5　イギリス支配の性格を植民地統治と認めた上でインドの自治に向かって運動を推進しようとした一派が過激派と呼ばれ，イギリス皇帝への忠誠を誓いつつイギリス支配の人道性に信頼と期待をかけた一派が穏健派と呼ばれた．１９世紀末から今世紀初にかけて両派の対立が顕著となる．ついに１９０７年の年次大会（スーラット）において国民会議は過激派の脱退により分裂することになる．

6　Lokmānya Tilak（１８５６－１９２０）　－　マハーラーシュトラ出身．教育家，思想家，ジャーナリスト，社会運動家，政治家など，多方面にわたつて指導的活躍をした．Lokmānya は敬称，本名Bālgangudhar Tilak．

7　Lala Lajpat Rai（１８６５－１９２８）　－　パンジャーブ出身．弁護士．アーリヤ・サマージの教育関係の活動にも従事．コングレスの中で指導的な役割を果たす．流刑や投獄の弾圧にも屈せず独立運動に挺身．ジャーナリストとしての活躍のほか，多数の著作を遺した．

8　Pherozeshah Mehta（１８４５－１９１５）－　ボンベイ出身の弁護士，政治家．コングレスの創立にも参与．

9　Gopāl Krishna Gokhale（１８６６－１９１５）－　マハーラーシュトラ出身．教育家，社会運動家，政治家．中央立法院議員をつとめた．

１０　Madan Mohan Mālaviya（１８６１－１９４６）－　U．P．出身．初め英字紙・ヒンディー誌紙の発行・編集を手がけジャーナリストとして活躍．教育事業に関係，バナーラス・ヒンドゥー大学の創設に尽力．ヒンドゥー教の擁護，中央立法院議員などコングレスの指導者として活躍．

１１　Dādābhāi Naoroji（１８２５－１９１７）－　ボンベイ出身．「コングレスの父」とか「インドのグラッドストン」とか呼ばれたインド民族運動の先駆者，国民会議の指導者．１８９２－９５年にかけてイギリス下院議員．

１３　留学成らず

ドーン・ソサイティー及び国産品愛用運動の感化を受けて私は国のためになんらかの形で奉仕すべきであると考えるようになった．それには兄の影響も幾分力があった．しかしまだ，この念願をどのようにして達成すべきか明確ではなかったし，どのような奉仕をなすべきかなにをなすべきかもはっきりと理解していたわけではなかった．これはまだ時折頭の中で考えてみるほどのことにしか過ぎず日常の瑣事につい消え失せていくだけのものでしかなかった．学生会議の結成という一つの道は見つかったものの，これが恒常的なものであるかこれにも変化が生ずるものであるかということについては，解りもしなかったしなにも言えなかった．もっとも一つだけ，というのは，役人にだけはなるべきでないと思うようになっていた．従って文学士課程を終えてからも県の行政長官補（Deputy Magistrate）になるための申請は行わなかった．兄も申請には反対だった．父は私が弁護士になるのを希望していた．兄は不幸にも文学修士にはなれなかった．カルカッタで暮らすにせよどこで暮らすにせよ家からそれ以上学資の仕送りを続けてもらう意志はなかった．兄はドゥムラーンオ・ラージ・スクールという高等学校の教員になった．私は行政長官補になる考えを放棄してカルカッタで文学修士課程と法学士課程の勉強を始めた．

学生会議が設立されてから私が一つ熱中したことがあった．どのようにしてだれに言われて考えついたことかは説明出来ぬが，なんとかしてイギリスへ行き，インド文官勤務[1]の試験に合格しようと考え出したのである．役人になる気持はなかったのにどうしてそのようなことを考えついたものかわからない．これには兄の後援もあった．家からの仕送りではとうていイギリスへの旅費な

どの工面が出来るはずもないので，なにか他の方法を考えねばならなかった．サッチダーナンダ。シナー氏は私のこの意図を知られると喜んで下さり，また，ブラジュキショール氏には以前から同意をいただいていた．件のガネーシュ博士の会食の後ブラジュキショール氏はアムビカーチャラン氏の日本渡航をずいぶん後援された．私のイギリス行きもどうしても実現させるべきものとお考えになり，資金調達にとりかかられた．ムンシー。イーシュワルシャラン氏もこれに関心を寄せられアーラーのラーイ。バハードゥル。ハリハラプラサード氏にはいくらか御寄附をいただいた．出発後の費用は兄やこの人たちの協力や家からの仕送りでなんとかしようという算段であった．両親はこの計画に反対し，騒ぎ立てるかも知れないとの心配はあった．私はこのことでパトナーとイラーハーバードへ行った．兄も同行してくれた．父には内緒にしておいた．父の許しが得られる見込みは全くなかったからである．出発の日定を決め，カルカッタで洋服も新調した．

それまで私は洋服は一度も着たことはなかったのだが，イギリスでは洋服以外の服装ではいけないだろう，と考えたものだから洋服店で新調したのであった．これが１８９８年以来，私が舶来衣料を買い求めた唯一の機会であった．旅券の申請をし，手続きは進行中だった．手続きが完了しても出発前には父にはなにも知らせていないので家の側からはなんの邪魔も入るまいと考えていた．この計画にはカレッジの３，４人の仲間も加わっていた．一人はビハール出身のシュカデーヴプラサード。ヴァルマー君で，他はみなベンガル人だった．私が世話になっていたのは兄のほかにブラジュキショール氏，シナー氏，イーシュワルシャラン氏，それにハリハルプラサードシン氏であった．

兄とブラジュキショール氏と一緒にイラーハーバードへ行き，イーシュワルシャラン氏宅に泊まった．イラーハーバードには私の家内の親戚筋の青年が数人カレッジに在学していた．だれにも会わなかったのだが，ともかく私のイギリス行きの話を知ったらしく，訪ねて来た．皆は私は来ていないと言ったのだが，私が家に内緒でイギリスへ行こうとしており，今イラーハーバードに来ている旨の電報を打った．電報を受取ると父も家族の者も大変驚いた．父は体の具合がよくなかったので来れなかったが，母と姉がすぐさまイラーハーバードへやって来た．私がイラーハーバードからそのままイギリスへ行くのだと思い違いをしていたのである．その時は相談と金の工面に出掛けたのであって，一泊するとすぐカルカッタへ戻って来た．

母がイラーハーバードへ着いた時には私はもういなくなっており，イーシュワルシャラン氏の家に訪ねてみると私はもうカルカッタへ帰ったと知らされた．私はカルカッタに戻っていたのでこのようなことはなにも知らなかった．父が病気だとの電報が来たので家に戻ってみて初めて事の次第を知った．父は病気には違いなかったがさして重病ではなかった．もっとも，悲しげな様子ではあった．家では大騒動になっていた．兄も戻ってきた．父は兄が私のイギリス行きを援助していたということでとても残念がった．私が家に戻ったことで悲しみが一層こみあげた様子で，みなが声をあげて泣き出した．父はきっぱりと私にイギリス行きを許さぬと言った．もし私が行こうものなら自分は助からぬだろうとも言った．私はこれまでの話をすっかり話して絶体行きませんと約束した．父は私の言葉を信じてカルカッタへ戻るのを許してくれた．

カルカッタでのことだが，すべて一通りの準備が整ったところでちょっとした出来事があった．ついでにそれを記しておこう．イギリス行きの計画を知っていた友達はみなこの件に関連していた．みなイギリス行きを願ってはいたのだが，その機会にまだ恵まれていなかったわけである．みなは私に続いてなんとか都合をつけて近いうちに渡航することを考えていた．ある日，ロー。カレッジからの帰途，仲間の一人がひとつ占師に占ってもらおうではないかと言い出した．その仲間が占師を知っていたのでみな一緒に行った．占師というのは年老いたバラモンで，年格好は６０歳ほどであった．自宅を仕事場にしており，訪ねて行ってしばらくすると「お前さんたちの用件はわかっている．」と言う．そこで仲間の一人が尋ねた．尋ねることはただ一つ「イギリス行きはうまくゆくだろうか」ということだった．私たちは黙っていた．ただ心の中で思っていただけである．占師は私には「今はだめ，ずっと後になってから願いはかなえられよう．」と言った．シュカデーヴ君には，「お前さんの願いは間もなくかなえられよう．」，と言った．別の友人にも，「しばらくしてかなえられよう．」と言い，もう一人の友人には，「かなえられないだろう．」と話した．

私たちは礼金に１ルピーを差出し，礼を言ってそこを出た．途中，私たちは，あのおいぼれにわかるものか，と冗談をとばしていた．私はなにもかも準備をおえているのに行けなくなり，なに一つ話の進んでいないシュカデーヴが行けるようになるなんてとんでもない，と大笑いしながら家に戻った．ところが，家から電報が来たのはその後のことである．私の出発は突然中止になり，家から帰って来ると私の出発は取止めになりシュカデーヴの出発の話がもち上がった．シュカデーヴは私が用意した衣服とお金を持ってある日ついに出発してしまった．衣服もお金も友人にさえわからぬように寮にかくしてあった．シュカデーヴについても父親から邪魔が入るのではないかと懸念されたので内緒にしておかれた．それに資金の工面に出かける必要もなかったので全く秘密のままになった．出発の日には友人たちに家へ帰るのだと告げた．私たち２，３人が駅まで見送りに行きボンベイ行きの汽車に乗り込ませた．ボンベイから出発の知らせが来るまではひょっとして事が知れて呼び戻されたのではないかと心配であった．しかし家族が知ったのは船が出港してからであった．非常に親密にしていたカルカッタ在住の親戚すら知らぬほどだった．

(註)

1　Indian Civil Service ― イギリスのインド統治を支えた柱の一である官僚機構の最上級のもの．この試験には年齢制限ばかりでなくイギリスでの修学が必須とされたり，試験地がロンドンと限られるなどインド人青年には大変不利なことが多かった．

１４　学生生活の終り

シュカデーヴをイギリスへ送り出してから私はコングレスへの奉仕活動に精を出したが，コングレスが終わるとまた勉強にとりかかった．父の容態は悪化する一方で，間もなく重態になった．連絡を受けて私はカルカッタから兄はドゥムラーンオからジーラーデーイー村へ帰った．父は数日後に息を引き取ったが，家族はみな死目にはあえた．すでに兄は娘二人と息子のジャナールダンをもうけていたが，私の長男のムリトゥユンジャヤが生まれたのもその年のことだった．父は孫たち

の顔を見てとても満足していた．容態が悪くなったので父は皆を呼び集めて祝福を与えてくれた．

父が亡くなったために家の中はいろいろと取込みが生じたし，私たちもみな悲しいおもいをしたが，私には一つだけ心慰められることがあった．イギリスへ行かなくてよかったということである．もしも私が行った後で父がこのように亡くなったのであれば，私はどれほど悲嘆にくれたか知れぬだろう．私はカルカッタへ戻り，兄はドゥムラーンオへ戻った．家の用事は少し前から兄が見てくれていたのであったが，以後すっかり兄に任されることになった．兄は時々ドゥムラーンオから家の様子を見に帰って来た．兄は私の学資の面倒も見てくれた．兄自身は学生の頃，時々仕送りの遅れることがあり，お金に困ることがあったのだが，私には父の存命中も亡くなってからもただの一度もお金に不自由はさせなかった．私が成績がよく試験にも立派な成果をおさめているのであるから，勉強に専念して他のことに心を労することのないようにしてやるべきだというのが兄の気持だった．

奨学金は引続きもらっていたが，父も兄もそれを学資には含めず，仕送りはそれとは別にしてくれていた．私はその中から授業料を納め，残りは書籍代にしていた．文学士課程の卒業試験をパスした時に二つの奨学金をもらうことになった．一つは毎月もらう５０ルピーのもので，それは月々使っていった．もう一つは月額４０ルピーのものだが，文学修士の試験に合格したら一括してもらうという条件がついていた．修士試験に合格後，４８０ルピーをひとまとめにしてもらったが，イギリス行きの準備で生じた借金の返済にあてた．

先に記したように予科の試験を受けてから試験に幾分無関心になってきていた．われながらどうして文学士の試験で一番になったのかわからなかった．修士課程に入ってからは試験への不信感は一段と強くなった．その年はイギリス行きの騒ぎと父の死去のため勉強以外のことにつぶれてしまい，気持も落着かなかった．父が亡くなったのは１９０７年の２月か３月のことである．試験は１１月か１２月に行われることになっていた．夏の休暇には数日間友人たちとカルサーンに行って試験勉強をした．修士の試験では私は一番にならなかった．私よりも好成績の者が幾人もあったがそれを悲しいとは思わなかった．優秀な成績をあげようと願ったわけでもなく，特に受験勉強をしたわけでもなかったからである．

いよいよこれから先なにをしようかという問題に直面することになった．試験を済ませるとドゥムラーンオの兄のところへ行き，しばらく留まった．弁護士試験を受けたものかどうか考え続けた．弁護士業にはあまり気乗りしなかったし，自分にはその能力がないのではないかと思うようにもなった．なにかしら自分の能力に不安を抱くようになった．もっとも，役人にならぬことはすでに心に決めていた．

そうこうしているところへ友人のヴァイディヤナートナーラヤン・シン氏がムザッファル・カレッジの教師になってくれると大変ありがたいのだが，と手紙で伝えてきた．Ｖ．Ｎ．シン氏はそのカレッジで教鞭をとっていたので，私はその勧めに応じて願書を提出した．採用されることに決まり，１９０８年の７月にカレッジがはじまると赴任した．仕事も面白く，土地の人たちとも顔見知りになった．しかし，兄はそれに満足していなかった．カレッジの経営は徐々に不振になって行

った．私はやはり弁護士になる準備を始めることに決めた．法学士課程は履修していたのだが，検定試験は受けていなかった．兄は，もう一度カルカッタに戻り，試験を受けて弁護士になるように勧めた．

こうして学生生活が終わり，実社会に足を踏み入れる時がやってきた．学生の頃を思い出す度毎につくづく幸福な時代だったと思うが，また，それを有効に用いなかったことが悔やまれもする．兄を先輩にもったことは幸運なことであった．私の心に正しい考え，正しい精神が生まれたとすれば，それはすべて兄が植えつけてくれたものである．修学期間だけはなに一つ苦労をさせずにおこうと兄は常に心を配ってくれた．家計が左前になっていることさえ私には感づかせないほどであった．カルカッタでもそれに先立つチャプラーでも私はいつも友人たちと親しく交わっていた．だれとも一度もなんの争いもなかったように記憶する．喧嘩など考えもつかぬことで，いつも和やかであった．幾人かとは特に親しくなり後々までも親交は続いた．勉強については競争心や対抗意識は生まれたが，だれ一人私にいやがらせをすることもなかったし，気まずいことにもならなかった．困ったことがあればだれかれを問わず互いに助け合った．競争相手と一緒に試験準備をしたことさえある．予科の試験準備の折は，高等学校で私に次いで次席となった友人と一緒に勉強した．このように他の試験にも皆と一緒に勉強したものであった．

カルカッタへ出てイーデン・ヒンドゥーホステルで暮らしたことは大変有益であった．おかげで私は目を開かれた．もしカルカッタへ出ていなかったならどうなっていたろうかと考えるのは意味のないことである．だが，カルカッタ以外のところではそれほど得るところはなかったと信ずる．イーデン・ヒンドゥーホステルでベンガルの友人たちと一緒に暮らしうちとける機会は恐らくよそでは得られなかったろう．ベンガルの友人はなつかしく思い出される．私はそのだれ一人に対しても憎しみを抱いたことはなく，まただれ一人私にけしからぬ振舞をしたこともなかった．とげとげしい言葉づかいをしたことすらなかった．かの友人たちと共に過ごした月日はこの上なく楽しく有益な毎日であったと思う．この友人たちにとりかこまれて暮らしている間に私はひとりでにベンガル語が話せるようになった．今日も私の多数の友人はベンガル全体にひろがっている．その後随分経ってから非協力運動の頃ベンガルを遊説していると行く先々で昔の顔馴染みに出会って過ぎし日のことを思い出したものである．

私がコングレスの議長になった時ビハールでは１９３８年に再度ベンガルとビハールとの間の問題がもち上った．その後，私はコングレスの中でベンガルの一部の人々には気に入らぬことをしなければならなくなった．私はいろいろと非難を浴びせられ，言論界からきびしい批判を受けたがそのためにその人たちに憎しみを抱くようになったとかなんらかの感情を抱くようになったとは思わない．そのようなことは想像すら出来ぬことである．あれほどの長きにわたる美しく楽しかった共同生活や友情の交流，それになつかしい思い出を忘れ去ることができるものだろうか．私は義務としてたとえだれかになんらか気に入らぬことをしなければならぬことがあったとしても，自分の心に問うてみれば，他人の望まぬことをわざとしたことはなかったと断言することができる．ともあれそのようなことはみな忘れ去っても，青年の日々に心に刻み込まれたものだけは消え失せぬだ

ろう．終生，この思い出だけは忘れられないだろうし，１５年に及ぶ生活の間にベンガルが私に与えてくれたものも忘れることは出来ぬだろう．

カルカッタでは相当多くのビハール人とも親しくなった．私がカルカッタへ出たころはビハール人はほんのわずかしかいなかったのであるが，その数は次第に増してゆき，後にはかなりの数に達した．私たちはビハール・クラブを結成して毎週会合していた．カースト制度のことがとてもやかましく，ヒンドゥー・ホステルでは私たちは料理を別にするためにビハール人のブラーフマンを傭っていたほどである．私はガネーシュ・プラサード博士と食事を共にしていたが，カーストの制約は随分守っていた．博士は私と同じカーヤスト・カーストの人だった．故郷のビハールでは食べてはいけないことになっていた他カーストの者の触れた食物はそこでもやはり食べなかった．それほどの期間にも私はベンガル人の学生食堂では，カッチー・ラソーイー[1]は一度も食べたことはなかった．

ビハール人学生の多くとも親しくなったが，その人たちは今はビハールのあちこちに散らばってそれぞれ自分の持場で活躍している．従ってビハールへ行けばカルカッタ時分の友人のだれかに出合う．チャンパーラン県シカールプルのアヴァデーシュプラサード氏とジャガンナートプラサード氏，シャーハーバードのシュカデーヴプラサード・ヴァルマー氏，バーガルプルのクリシュナプラサード氏，ラーンチーの バドリーナート・ヴァルマー氏，バラバドラプラサード・ジョーティシー氏，サードゥシン博士，ラージェーシュワル・プラサード博士，バトゥクデーヴプラサード・ヴァルマー氏，ヴィンドヤヴァーシニープラサード・ヴァルマー氏などが親友であった．だが，この中の幾人かはすでに故人となっている．アヴァデーシュ氏との交際は大変実りが多く，後には私方と縁家になった．

(註)

1　Kacci Rasoi　―　水を用いて料理されたものを呼ぶ．これは，ギー（精製したバター）を用いて料理されたもの　―　Pakki Rasoi　―　に比べて不浄なものとなりやすいので（低カーストの者から受ける際などの）取扱いに一段と注意を要する．

訳・註　　古賀勝郎

・P．９２下７行の☆の次に，「史学，論理学，数学のほかに」を補う．

・P．９６下５行の☆の次に，「みようと誘ったので，私も３科目の特別コースをとった．」を補う．

・P．１０５上９行の☆の次に「サティヤナーラーヤンの縁起物語を語ってもらった．また，バラモンには」を補う．

・P．１０６下８行の☆の次に「改めて」を補う．